

---

# 遂行日記

よしくん

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遂行日記

### 【Nコード】

N8688A

### 【作者名】

よしくん

### 【あらすじ】

引きこもりニートの健。怪しげな本屋で購入した一冊の日記。日記によって彼の人生が大きく狂う事になる。この日記によってたらされた恐怖体験で彼自身の内面的なものも変わっていく。

## 第一話

「引きこもりニート」

真つ暗の部屋でパソコンの起動音にキーボードを打ち込む音とマウスのクリック音だけが部屋に響き渡る。

ディスプレイの明かりが部屋の照明のように思えた。黙々とキーボードを叩き続けている。

部屋にはごみが散乱していて、足の踏み場もない。ベットには夏だというのに毛布が敷いてある。

この部屋だけ、時間が止まっているようだった。少しばかりカビも見える。

パソコンディスプレイの後ろの机も物が散乱しており、飲みかけのジュースに小蠅がたかっている。

こんな衛生面最悪な部屋で健は高校卒業時から引きこもっている。大した友達もいなくて、もちろん彼女もない。完全に家族の一員から孤立をしている。

健が外出している所を家族は見たことがなかった。

ほとんどの時間を自分の部屋で過ごしている。

食事は家族が運びにくる。

欲しいものがあれば通販で買い物をしている。

もちろんお金は親が払う。

人間的にこういう行を取る人間を人はニートと呼ぶ。

健はどうでもよくなっていた。世間も社会もなにもかも。たとえ今この瞬間に地球が滅びても別にかまわない。

俺以外の人間は全部くずだ。

社会から完全に孤立し、見放され、自分の人生を投げ出している健に、

人生の転機が訪れる恐怖が待ち構えているとは等の本人夢にも思わ

ないだろう。  
そう。

すべての始まりは湿った空気で少し霧が出ていた、8月31日の一般で言う、

夏休み最後の日。

この日から健の死に物狂いの生きるための恐怖の戦いが始まるのだ。

「おい！だれもないのか！」

健が部屋から叫ぶ。家中に声が響き渡る。

その声に答えるものは家にはいなかった。

・・やくにたたねえな。

健は用事を家の者に頼みたいらしい。毎週木曜は週刊誌の発売日だ。毎週毎週、母が買い与えていたが、母が留守と知り、健は軽く焦りを覚えた。

もつともくだらない焦りだといえるだろう。

木曜発売の雑誌を金曜に読もうなどとても常識では考えられないと思っっている。

発売日のその日のうちに週刊誌を読みたいという健ならではの焦りだ。

健は時間を見た。夜の8時だ。今の時間帯は人気が少ないだろうな。コンビニに買いに行くか。

そう決めてTシャツを着替えて、ジーンズをはき、部屋の外にでた。いつぶりだろうか。かなり久しぶりの外出だ。

暗い階段を下りて、左手にある玄関で靴を履いた。

久しぶりに靴を履く。少しきつい気がする。つま先あたりが痛い。

玄関を出た。健は家の鍵をかけなかった。

家の事なんて関係ない。泥棒が入ろうが知ったことか。

そういう自己中心的考え方は一生変わらないのではないか。

そう思わせるような生活態度だ。

「外出」

コンビ二へ向う道のりが健には楽しく思えた。久しぶりの外だ。ただ道を歩くという動作を楽しがる健。わくわくして、少年期に戻った気にもなった。

いい気分で歩いて歩調よく歩いてると、

なにやら怪しい雰囲気を感じ出す一軒の本屋を見つけた。

長年この町に住んでるがこんな店見たことなかった。

いや、知らなかったただだと自分に言い聞かせた。

週刊誌ならここにおいてあるかも。そう思い健はその本屋へ向った。その時健は感じ取った。

何か特別な何かを感じる。この本屋には近づいてはいけない。

そう健の第六感が働いたのかもしれない。

これ以上進むと危険だ。嫌な予感がする。

本屋の引き戸を前に背を向けて帰ろうとした。

しかし健は頭のどこからか、ふっと好奇心がわいてきた。

久しぶりに外へ出て気持ち的にも澁刺として、もう少し冒険を試みたい気持ちになったのかもしれない。

もつと外の世界を探索してみたい。そういう感情が健に芽生えていた。

少しぐらいならいいか。

そう思い、健は少しばかり勇気を振り絞り、本屋へ再び進みだした。引き戸を開け本屋の中へ入っていった。

いらっしやい。。

健はびくついた。急に横から声を掛けられた。他人に喋りかけられたのはいつ以来だろう。

店内を見渡した。薄暗かった。不気味だった。

気味が悪そうな本がずらりと並ぶ。健が店内を少しばかり探索しながら本を見渡した。

どれもこれも訳のわからない本ばかりだな。

そして健は目的である週刊誌を探した。しかし置いてある雰囲気はまったくくない。つまらなさそうに本を見渡している。

そんな時、健に異変が起きた。

何か不気味な力を感じる。

自分の体をコントロールできない。金縛りにでもあったのだろうか。無意識のうちに気づいたらある本棚の前に立ち止まっていた。

気味が悪かった。まるで本棚にひきつけられたような気になった。

目の前にあった本棚の本を見た。一番上の段の端の本に目があった。黒色の本で、外見的になんら他の本と変わりはないが、なんとなくこの本だけ特別な何かを感じる。

気味が悪い。

遂行日記と書いてある。

店員がこつちを見てる事に気づいた。

何か問いただしたいのかと思うほど不気味な目線でこつちを見ている。

早く帰りたいかった。ここには週刊誌はない。これ以上は時間の無駄だ。帰ろう。

その時、またしても思考とは逆に別の好奇心が働く。

なんだろう。この本にはなにかある。不思議だ。どんな本なんだろう。

怖かったが、この本を手にとって見たかった。

少し手にとって見るか。

そう思い本へ手を伸ばした。

絶対読んではならない。

手をさし伸ばした時またしても第六感らしき力を感じた。

人間の本能だろうか。感情は前へ向っているのだけれど、腕がそれを拒絶するかのような。

しかしその拒絶する力も消えていった。

不思議と手が伸びた。

体が吸い込まれる感じがする。気分が悪くなりそうだった。

しかし不思議だ。手にとってみたが、不思議と何かにこの本に魅力を感じる。何の変哲もないただの黒い本なのに。

この本が読みたい。

おじさん。この本ください。

「不思議な力」

健は店を出て早歩きで家に向った。

周りの街頭が気味悪く感じた。

蛾が飛んでいるのが確認できた。

時間はわからないが、家を出てからかなりの時間がたっているように感じた。

ただ近くにあった本屋によって本を買っただけなのに凄い疲労感だ。歩きながら健は思った。

なんでこんな本を買ってしまったんだろうか。

少し後悔した。

本屋で起きた本にひきつけられるような奇妙な出来事を忘れたかのような言い草だった。

帰り道を歩いている時、健は何も特別な力は感じなかった。

家に着いて玄関を開けた。当然鍵は掛かってなかった。

健は家に入り、黙々と暗い階段を上がり自分の部屋へ入った。

その時週刊誌の事はすっかり忘れていた。

買った本を後ろの物が散乱している机に置き、パソコンを立ち上げ、メッセンジャーでチャットを始めた。

1時間ぐらいチャットをやっていると、相手が10分外出すると言いつつ出た。

そして健も10分間休憩をし、相手が戻ってくるのを待つ事にした。

腕を組みながら深くイスに座り、ぼーっとすごした。  
その時さつき買った本の事を思い出し、本を袋から出した。  
いつ見ても気味が悪そうな本だな。  
そして本を出した瞬間、またさつきの不思議な力を感じた。  
健は少し恐怖を感じた。  
何なんだこの不気味な感じは。  
しかし、半分度胸試しのつもりでこの「遂行日記」と書かれた本を  
開いて見ることにした

# 「日記の内容」

1989・7・2

担任の杉浦がいつも俺の事をばかにするんだ。  
バカだの、あほだの。  
大学進学も就職も無理だとはつきり言われた。  
じゃあ俺はどうすればいいんだよ。杉浦なんて死ねばいい。

1989・7・3

今日もスリッパにカッターナイフの刃を仕向けられた。  
この前もボンドをイスに塗られてて知らずに座って制服がぐちゃぐ  
ちゃだ。  
誰がやったか検討はついている。  
青山たちだ。中学の時からよってたかって俺だけを標的に嫌な事を  
してくる。  
俺の何が悪いんだ。あいつさえいなければ。  
青山なんか死んじゃえ。

1989・7・4 桐原和子・死

お母さん。お母さんが悪いんだよ。兄貴ばかり見て俺はまるっきり無視じゃないか。俺のことはまるで干渉しなかったね。いじめを受けてもしらんぷり。殺されて当然だったと思うよ。

1989・7・5

お父さん。

なんで俺ばかりぶつんだよ。

なんで殴るんだよ。

何も悪い事してないじゃないか。

痛いよ。お父さん。兄貴には優しくしてさ。

俺ばかり。もう耐えられないよ。お父さん。死んでください。

1989・8・31

もう僕は耐えられないよ。

僕はこの世界にいちやいけない人間なんだ。

僕は友達も親も教師も誰も信用できる人はいなかった。

いつも一人だったんだ。なら僕は、これから一人で生きれる世界に行くよ。

僕の友達はこの何でも話せる日記だけだよ。

本を開いた瞬間からすべてが始まる。

この本を開いて日記内容を遂行しないで、二日間たつと、三日目から一日ごとに周りの人間が死に至る。六日間で肉親すべてが死に至り、七日目で当事者が死ぬ。

この本の事を誰かに悟られてはならない。

悟られれば、当事者は死ぬ。

日記内容の遂行がすべて終わらせ、この本を燃やす。すると呪縛は解け、当事者および当事者の肉親、周辺者が死ぬ事はない。

なんだこれ。

健は自分の目を疑った。

あまりにも悲慘的な日記が5日分書いてある。可哀想な日記だ。31日から書かれていない。

この内容からすると自殺したんだろうか。

そして健は7・4日の桐山和子死亡の文が目に入った。

この文書はおかしい。

殺されて当然？

なんでこの文だけ進行形なんだよ。

もうこの桐原和子って人は死んだって事が。

わけわかんないよ。

それに遂行しなければ人が死ぬ？

この書いてある通りだと7日で当事者が死ぬって当事者は俺のことか？

7日以内にこの日記を遂行させるっなんだよ。

遂行って何にも命令文も書いていないじゃないか。

その健にふつと新たな発想が芽生えた。

それはあまりにも残酷で、恐怖を煽るような発送だった。

まさか日記の登場人物を殺せってことじゃ。

その発想をすぐさま自己否定した

馬鹿馬鹿しい。やってらんないよ。

健は本を後ろの机の上にポンと置いた。

奇妙な緊張感と不安感ハメッセンジャーでチャットを再開した頃には忘れていた。

## 第二話（前書き）

日記が本物だとしり、登場人物をいち早く殺害するため純也の母校を訪れる。

## 第二話

「現実」

それからは前と同じようにパソコンへ向い黙々と生活を自分の部屋で過ごした。

部屋でパソコンを使い続け、今までどおりの生活を送り、日記を購入した日から三日がたとうとしていた。

そして、三日目の夕方。

恐怖体験の始まりの合図であろうノックが健の部屋へ響いた。

「なんだよ。」

母親は少し間を置いて口を開き始めた。

「あのね。島根のお祖父ちゃんが亡くなったわ。交通事故らしいの。だから明日から島根へ行くことになったから。」

「え？」

体が熱くなるのを感じた。ぞっと首筋あたりの血の気が引く。

まさかな。

健はふと三日前に買った本を思い出した。

そして本を手にとってルールを読み直した。

「この本を開いて日記内容を遂行しないで、二日間たつと、三日目から一日ごとに周りの人間が死に至る」

本を買ったのが三日前だ。二日の間が空いて三日目の今日から身の回りの人間が一人ずつ死んでくのか。

そして七日目には健も死ぬ事になる。

緊張が走る。

暗闇に慣れているのにこの日だけは暗い部屋に恐怖を感じた。

そして久しぶりに電気をつけた。

こんな馬鹿な話があるのか。夢でも見ているのか。

しかし現に一人日記のルール通りに死んでいる。

ここから先どうすれば。

しかし健は冷静に考えた。  
あと一日待ってみよう。

ただの偶然かもしれない。

現状維持を決断した。明日もし俺の身の回りの人が死んだら、  
その時は・・・

健は何も思いつかなかった。

とにかくこの本が本物かどうかを確かめなければならない。

緊張した面持ちで一日がたった。

あつという間だった。この一日は生きた心地がなかった。

珍しくパソコンでチャットをしないで、一日中ベットの上で、上を見ながら横になっていた。鼓動が聞こえる。軽く吐き気がする。めまいもしそうだ。

テレビをつければ何か情報が入るかもしれない。

そう思いテレビをつけた。

親は島根に行つて家の中は俺だけだ。自分で情報を手に入れなければならなかった。

チャンネルを回して、ニュースを探した。

ニュースでチャンネルを固定した。しばらく見ても関連した情報が入ってこない。

パソコンで探したほうが早いと思いパソコンの前へ座った。

そしてインターネットを開いて探してみた。

インターネットでも関連した記事は出てこない。

インターネットで記事を探して20分。テレビのニュースから衝撃的な発言が聞こえてきた。

「名古屋市緑区の路上で男性二人が自転車で二人乗り運転をしていたところ乗用車とぶつかり、病院へ転送されましたが、まもなくふたりとも死亡しました。死亡したのは、春日良一さん20歳。河合正孝さん20歳。」

決定だ。この本は本物だという事が証明された。

健に焦りが生じる。まさかあのふたりが。高校で唯一中の良かった

2人だ。

高校二年までは一緒に遊んだりもしてた。  
どうすればいいんだ。

本の内容だとやはり遂行と言うのは登場人物を殺せと言う事なのだろう。

人殺しなんて出来るわけがない。

しかしあと三日で日記の登場人物を殺さなければ、肉親も周辺の間すべてが死んでしまう。そして四日後には俺も死ぬ。  
やるしかないのだ。残された時間は二日とあとわずか。

健は一生分の労力と精神力を使うだろう。

健は本の内容やルールを改めておさらいをし、これからの事を考え始めた。

「焦り」

今の時間は三日目の21時。健は本の内容を落ち着いて詳細的に考え始めた。

2日と数時間で身内の者すべて死ぬと内容的にそう読み取れる。

日記の遂行命令は書かれていないが、この青山って言う少年と、杉浦って教師と父親の事が悪く書かれている。

おそらく遂行と言うのはこの3人を殺せて事だろう。

母親の桐原和子死亡と書かれてある文章はどういう意味だ。

この日記通り、89年の7月4日に死亡したのかもしくは、この本を前に読んだ人が日記を遂行させて、実際に殺したのか。

どちらにしても健の生きるすべはあと三日弱の時間でこの登場人物を殺さなければ、身内も自分もすべて死ぬ。

こんな現実離れた内容は誰に話したって信じないだろう。

しかし、実際に身の回りの人間が3人死んでいる。この本は本物だけれど健はこんな不可能な事に疑問を抱いていた。

17年前の奴なんかどうやって探すんだよ。

第一、登場人物といたって苗字だけしか書いていない。手がかりがなさ過ぎる。

このまま、三日たつて俺は死んでいくのか。

そう思うと、健は凄まじい恐怖を感じ、青ざめた表情をあらわにした。

この時ある事を思いついた。

日記最後の89年8・31。日記の内容に書かれていた内容が死を意味し、実際に少年が自殺していたら、ニュースになっているはずだ。まずはここから探してみよう。

パソコンを起動させ、インターネットを開いた。

図書館や、過去の事件を調べるために警察に行く事も考えたが、一番使い慣れているパソコンを使って探す事を優先した。

そして30分で過去のニュースがまとめてあるサイトが出てきた。かなりの数の事件がおきている。

年代別に89年8月と検索した。

.....

あった。

桐原純也死亡。

ほんとに自殺をしていた。すぐに目についた。

「名古屋市中川区、区内の高校3年生桐原純也君自殺。受験のプレッシャーに負け自殺か。父親、虐待の容疑も認める。」

中川区つてすぐそこじゃないか。こんな近くでこんな事が起きていたのか。

89年の時の高校三年生、18歳か。今生きていたら35歳か。登場人物の青山も35歳でおそらく家庭も持っているんだろう。

青山を殺す事を考えたら気の毒に思えた。

まずは中川区に直接行って、もつと桐原純也の事を調べて、一刻も

早く、この三人に近づいて殺さなければ。

健は部屋を出た。地図と殺人用のナイフを持って。

一階に下りて、母親の目を盗み引き出しから現金を10万円ほど持ち出した。

大金がここにおいてある事は前々から知っていた。

外のクラクションが聞こえた。

タクシーを呼んでおいたのだ。

着いたらクラクションを一回鳴らすようにと。

タクシーに乗るのは小学生以来だ。

ドアを開けて、タクシーに乗り込んだ。

心地よい匂いがした。

こんなほんのちよつとの事でも健にとっては冒険だった。こんな健が本当に人が殺せるのだろうか。

「お客さんどこまで？」

運転手が聞いてきた。

「とりあえず中川区に行ってくれ。」

「中川区に付いてからどうしますか？」

「え・・まだ決めてないけど。」

こんな目的地もろくにいえない客は初めてでないか。と運手主は思つたに違いない。

「わかりました。ついたら言います。」

そしてタクシーは中川区に向けて発進した。

車自体何年ぶりだろうか。公共交通機関も利用しない。

高校までは自転車で登校していた。自転車以外の乗り物に乗ったのは中学生依頼かも知れない。

しかしそんな思いもすぐに捨て、すぐさま自分の置かれている立場を考えた。

へたすりや三日ですべて死ぬんだぞ。もし仮に生き残ったとしても刑務所だ。殺した被害者の家庭や、人生をすべて奪うのだ。

健は今まで自分以外何も興味がなく、いらない人間だと思ひ込んで

いた。

しかし、この境地に立たされて、少しばかり考え方を変えつつあった。あの日記の内容も驚かされた。

こんな悲しい少年が世の中にいる事が考えもしない事だったのだろう。

いろいろな事を考えているうちに運転手に声を掛けられた。

「中川区です。どうしますか？」

健は考えたが、ある発想を思いついた。

「うんと。。あの少しお尋ねしたいんですけど。」

「はいはい。」

運転手は愛想よく応答してくれた。

「中川区内に高校はいくつぐらいあるんですか？」

「中川区の中に高校は一つだね。」

「本当ですか？」

「うん。一個だよ。」

驚いた。区内で一個だったらすぐにわかる。桐原純也が区内の高校生って事は間違いなかった。

案外早くに3人に近づけるかもしれない。

「じゃあその高校に行ってくれませんか？」

「了解。」

車内で運転手に何の用事か聞かれた。

今置かれている立場、今からしようとする事、すべてをぶちまけたかった。しかしふつと日記の内容を思い出した。

「この本の事を誰かに悟られてはならない。悟られれば、当事者は死ぬ。」

内容を思い出し、健は家の都合とだけ答えた。

運転手も不思議な顔をしていたが、強く問いつめてこなかった。

健は改めて思った。完全に孤独な戦いなんだ。助けは受けられない。怖かった。叫びたかった。

こんなはずでは。そう健は思い続けていた。

「関口高校につきました。」

運転手に言われて健は財布を出した。

そして一万円のまま渡して、細かいおつりをもらいタクシーを出た。タクシーを出ると、肌寒さを感じた。

これからどうすればいいのか、それを考えるために健は高校前の小さな公園に向った。

「殺人計画」

公園のベンチ内で健はこれからの行動について考えはじめた。

何も考えなしに高校まで来たが、17年前の事件の関連したことなどこの高校が世間に教えるわけがないと改めて考えた。

そして、ある発想が思いついた。一人目の殺人の事だ。

日記には杉浦の事が書かれていて、この事から桐原の高校教諭の事がわかる。

すなわちこの関口高校の教諭をやっていたんだ。

とにかく、高校に入って、事務室に行くんだ。

事務室で、杉浦先生はいるかと聞く。その杉浦先生なら桐原純也の事を絶対覚えているはず。おそらくいない。教え子に死なれて黙々と教師を続けていけるとは思えなかった。

杉浦先生がいたとしたらどうする。俺は赤の他人なのだ。

杉浦先生となんか関わりがあれば、別だが。

いろいろ考えているうちにある考えが浮かぶ。

脅してみるか。

しかし、内容は？相手がびびるような内容じゃなければならない。

しかし、健には少しばかり確信が持てるようなネタを持っていた。

17年前の桐原純也の事だ。この事を彼に問い詰めれば、何とかなるかもしれない。

そしてあるシナリオが頭に浮かぶ。

事務で杉浦を呼ぶ。杉浦が学校を辞めていたら、警察を装い、杉浦の住所を聞く。こんなに上手くいくとは思えないし、上の管理の人が出てくるかもしれない。そうされた場合上手く逃げる。そしてこの事が上手くいけば事務の人が杉浦の住所を教えてくれるかもしれない。

学校を辞めてなくて、学校に滞在していたら、新聞会社の記者を装い、杉浦を呼ぶ。

留守のようだったら、連絡先を教えてもらう。

教えてもらえなかったら、また来るといい、その場を立ち去る。

杉浦ともし会えたら、桐原純也のネタを糧に、脅して、二人きりになる。

そして公園に連れて行き、持っていたナイフで殺す。

おそらく、犯人の最重要人物として、事務に行った俺が浮かぶだろう。

なので変装をする。かつらとめがねだ。一応偽名を実際に存在する人の名前を使う。

警察官の手帳も欲しい。。

しかし、そんなものの急に用意できる訳がない。探すんだ。

そう考え健は近くの漫画喫茶に入った。そしてパソコンで名古屋市内の事を調べた。

名古屋市内ならタクシーでいける。金はある。

探していると、名駅付近にマニア向けの小物売り店が一軒だけあった。

健は少しほっとした。

内装の画像があったので見たら、警察官の服やら、消防士の服やらいろいろとあった。

ここなら警察手帳も置いてあるはずだ。

すぐさま行こうと思い、住所を紙にひかえて、タクシーを呼んだ。そして運転手に紙を渡した。

店には30分で着いた。運転手には店の前で待機してるようにいった。

運転手はこんなマニアックな店に行く健をどう思ったのだろうか。店にはいろんなものがあつた。

チアガールの衣装まである。こんなものどうするんだと健は思った。そしてお目当てのかつらと、めがねと、警察手帳を探した。

お目当てのものはすべてあつた。

警察手帳は2万円もする。高かつた。

しかし躊躇はしなかつた。

茶髪にクロぶちめがね。つけた様子を鏡で見たがこれは本当に自分なのかと疑つた。

そして店をでて、タクシーに乗り込んで、行き先を伝えるため口を開いた

「関口高校へ行ってください。」

### 第三話

「5日目の不幸」

関口高校に向う途中、救急車のサイレンが聞こえた。嫌な予感がした。

健はふとして時計を見た。0時を回っていた。

そして日付が変更されていた。

日記人物を殺害しないで五日目に突入したのだ。

だから五日目の今日もまた一人が死ぬ。

まさかもう日記の被害者が出たのか。だからさっきのサイレンは。

健は少し思いつめたが、考えすぎだと思いを切り捨てた。

まさかそんな。

落ち着こう。

健は落ち着きを取り戻していた。

今日もまた俺の身の周りの人間が死ぬのだろう。今度は誰が死ぬだろう。

早く日記の登場人物を殺さない限り怪奇殺人は続く。

健は罪悪感にみまわれた。

ある意味人殺しだ。そしてこれから本当の人殺しを行っんだ。

健は自分を追い詰めてた。

数分後、サイレンを聞いた健の嫌な予感は当たる事になる。

関口高校へ向う中、タクシーの運転手の無線がなる。

「県道258で、交通事故発生。白いVOXYの乗用車が事故。」

無線が鳴り始めた。

「おっと。すいません。事故があったみたいです。少し、大回りになります。」

さっきのサイレンは交通事故か。しかし胸騒ぎがする。

先ほど聞こえた無線の声。健は白いVOXYに物覚えがある。

「すいません。その交通事故現場に行ってください。」

思わず言ってしまった。

そしてタクシーは事故現場へ走り始めた。

タクシーの中で健は複雑な面持ちで外の景色を眺めていた。どうか違いますように。

しかし、かすかな願いも神は聞かないようだ。

現場に着いた。すぐさま誰が事故を起こしたかがわかった。

白いVOXY。ナンバーまで暗記していた。

「先生！！！！」

タクシーを降りて救急車へ走った。しかし中の様子が見れない。

そして救急車は発進した。野次馬は残された健を見ているようだった。

別に健は目立つ行動をしてない。しかし、同情の目が健を襲う。

かつてこのVOXYには中学時代何回も乗ったことがある。

高校の進学や、将来の事、いろいろと教わった。そして健は先生の母校に入学した。先生がいい高校だと言ったからだ。

教師と生徒ではなく友達とも言えたのだろうか。

仲の良かった春日良一と河合正孝で3人で先生の家に遊びに行った事もあった。

連絡は高校卒業と同時に途絶えたが健は先生を尊敬していたし、好きだった。

これで仲の良かった健の中学での親しい人はみんな死んだ。

まさか先生が。考えられなかった。そして健を絶望が襲った。そして健に変化が訪れた。

もうなんでもいいや。目の前が真っ暗になり、自分をコントロールできなくなったのかも知れない。健に感情がなくなった。

殺してやるよ。生きるためなら殺人だって犯してやる。

「殺害計画最終段階」

健は関口高校へは行かず、ホテルへ向った。

早くも5日目の被害者は出た。だからもう死亡者の心配はない。

もう深夜1時を回ろうとしている。こんな時間に高校に訪れたら不審者だ。

午前中は学校の授業があるだろう。なのでもし杉浦が高校で勤務をしていたらきつと学校にはいる。

もし退職していたら警察を名乗って住所を聞き出す。

17年前の再捜査といえば嫌でも教えてくれるだろう。

もうこの時健は杉浦を殺す事しか頭になかった。

ためらいも否定もなんの感情も起こらない殺人ロボットと化していた。

健は犯行時間を夜の暗くなった時間と考えていた。

まず午前中の11時ぐらいに学校を訪れて、杉浦がいるかを聞く。

もしいたら、また夜に来ると言う。

どういう条件かと聞かれたら、新聞記者を装い、遺言が見つかったとでも言おう。

そういえば嫌でも杉浦は逃げられないだろう。

そしてふたりつきりになって殺害だ。

二トの自分には良く出来た殺人計画だと健は自画自賛した。

そしてゆっくりとホテルのベットへ横になって目を閉じた。

「偶然にも」

時計は11時を指している。そろそろ行くか。

クロぶちめがねとカツラをつけて、警察手帳も左ポケットに入れた。運転手に関口高校へ向うよう言った。そしてタクシーは動き出した。まずは事務局に言って杉浦の事を聞き出すんだ。余計な感情は表に出すな。

事の支障をきたす。冷静になれ。

いろいろと思考をこらしていると学校の前に着いた。

お金を払い、学校へ向った。門をくぐり、目的地を探した。

事務局、事務局、、

どこだろう。結構広い校舎で検討もつかない。

そこへ一人の庭師が目についた。その人に聞いてみよう。まずは身元を名乗らないほうがいい。学校の関係者だとも言っておこう。

「すいません。」

健は喋りかけた。

「どちらさまですか？こんな時間に。」

やはり聞いてきた。冷静に。

「あの、事務局の人に決算名簿の集計に来たんですけど、事務局を教えていただけますか？」

疑い浅い言い訳だと思った。てきとうに語句をならべたでたらめだ。

「そうですね。事務局はそこをまっすぐ行くと目の前だ。」

庭師は指をまっすぐ指して場所を示した。

「ありがとうございます。」

そういうと庭師が指を指した場所へ向った。そして職員室らしき部屋が見えてきた。

あれが事務局だ。杉浦を聞き出すんだ。

大丈夫だ。落ち着いて

健はドアをノックした。

コンコン。

ちゃんと喋れるだろうか。頭が回るだろうか。心配している矢先に声がした。

「はい。」

そういうと事務員らしき女がドアを開けた。

「あの、杉浦という先生はこの学校に勤めていますでしょうか。ちよっとお聞きしたい事があります。」

「杉浦は教職を退職されて、それからは事務官をしています。」

いた。しかも事務官とは。ツキはこっちに向いてきている。

「あの東京ＪＰＨ新聞の渡辺ですけど、１７年前の事で杉浦さんにお聞きしたいことがあります。」

すると事務員は戸惑いながらも答えた。

「はあ。１７年前ですか。わかりました。呼んで来ます。」

とうとう杉浦との対面だ。だが、殺害は夜だ。また夜に会うための約束をするのだ。焦るなよ。健は強く自分に言い聞かせた。

「はい。私が杉浦ですが？」

杉浦はこわばった顔をしていた。自分のせいで自殺した生徒の事を新聞記者が聞きに来るなんて。

「あの１７年前の事をお聞きしたくて伺いました。」

すると杉浦は強く叫んだ。

「帰ってくれ！話す事は何もない。」

予想していた事だ。ここからが正念場。

「そういわずに。桐原純也君と杉浦先生とのトラブルを起こしたと言う情報を耳にしてね。」

「そのトラブルは自殺と関係あるのではないかと思いました。」

杉浦は目が点になっていた。明らかに焦っていた。

「そんな馬鹿な。」

「詳しい事は後ほど。」

強硬手段に出たと思った。大丈夫だ。台本どおり。それから健は理不尽な理由を杉浦に述べた。

「まだ、あなたを書き立てる材料が見つかっていません。」

健は付け加えた。

「証拠がたりませんからね。ですがあなたの焦りようは明らかに何かを隠しています。夕方、また来ます。そうですね７頃にでも。」

杉浦は警察の恐怖と自己顕示欲にまみれた顔を見せながら健の方をずっと見ている。

「わかった。待ってるから、変な書き込みをしないでくれ。」

そう聞くと健はあと一言を付け加えた。これは無駄な邪魔が入るた

めのものだ。

「あの、私は新聞記者ですからね。逃げようとしても無駄ですよ。」

「犯罪はいけないことです。容赦なく記事にします。この事は内密にしといたほうが身のためです。私が来たことも内密に。」

「当たり前だ。誰にもいわん。貴様の根拠も無しに記事を書くなよ！」

「わかってます。」

そういうと軽く頭をさげ、健は杉浦から立ち去った。

上手くいった。ここまで上手くいくとは。

達成感の余韻に浸って、行きに止めてあったタクシーに乗った。

そして健はタクシーに告げた。

「漫画喫茶まで。」

夜の待ち合わせの7時まで暇を潰して、杉浦を殺害だ。

「空き地」

漫画は久々の娯楽のように感じた。

健は漫画を読み続けた。嫌な事を無理やり忘れようとしているかのように。

夜の6時半にたとうとしていた。近くにタクシー乗り場があるのは知っている。

漫画喫茶に入るときに確認したからだ。

そろそろ行くか。またいつ漫画が読めるかわからない。

タクシーを読んだ。

「関口高校まで。」

そういうとタクシーに乗り、ドアを強く閉めて高校へタクシーは発進した。

緊張する。健は犯罪の素人だ。いつかは殺害がばれるだろう。しかし、健は別に捕まる事に対して抵抗は持っていなかった。

しかし、日記の人物3人を殺すまでは捕まらないと健は強く思った。刑務所に入っては3人を殺す事は不可能だからである。

タクシーは高校前で止まった。校門に人影が見える。杉浦だ。健の来るのを待っていたのだ。好都合だと健は思った。

「乗ってください。」

健はタクシーの中で杉浦に向って叫んだ。

杉浦はタクシーに向って歩いてくる。

そして何かを訴えるかのような強い口調で言った。

「どこへ行く気だ。」

それを聞いて冷静に健は答えた。

「任せてください。」

そういうと杉浦はタクシーに乗ってきた。

それを見て、健は住所の書いた紙を運転手に渡した。

紙はある空き地の住所を示している。

その空き地はほぼ無法地帯で住宅が近くにまったく無く人通りも圧倒的に少ない。

叫び声が人に届く事はまず無い。殺人を犯すには絶好の所だ。

この場所は小さい頃よく遊んだ場所だからよく覚えている。

漫画喫茶に来る途中よって場所がまだあるか確認をした。

運転手はなんでこんな所に着たのか不思議に思っていたに違いない。

杉浦と健は無言の会話をしながら、タクシーを走らせて40分。

空き地に着いた。

「殺害」

杉浦の第一声が空き地内に響いた。

「どうして17年前の事なんて知っている？」

言葉を跳ね返すように健は答えた。

「何をそんなに驚かれているんですか？もちろん新聞記者ですから

調べればわかります。」

杉浦はむきになって答えた。

「俺はあの事件に関係してない！」

「そんなの知りません。現に遺言書がありましたから。」

血相を書いて答えた。

「なんでそんなもの。遺言書はなくなったはずだ。警察がそういつているんだ。」

そして殺人の口実にするセリフを言った。

「でも現にここにありますよ。」

杉浦は目の色を変えて食いついてきた。

「見せてくれ！！」

いよいよ始まる。

「じゃあ見せてやるよ。」

そういうと健はナイフを杉浦の肩辺りに突き刺した。  
うわぁ。。。

杉浦は叫んだ。そして倒れてもだえ苦しんでいる。しかし木々に囲まれて、住宅地帯が離れていて、声が人に届く事はまずなかった。

「なにをするんだ。」

健は脅すように恐々しくゆっくりと喋りかける。

「桐原純也の事を詳しく話せ。」

「私は何も知らない。」

そう聞いた健は肩の傷口を足で踏んだ。

杉浦は騒ぎ立てる。しかしその声は無情にも人には届かない。

「やめてくれ。。鮮明にあの頃の事は覚えていて。話すから。」

「変な事言ったら殺す。今の俺にはそれを実行できる理由があるんだ。」

「わかったから。」

そういつて杉浦は口を動かし始めた。

「純也は落ちこぼれたったよ。無口で、勉強もなんにもできなかった。」

た。いじめを受けてても無視したさ。俺も彼を人間的に好かなかったからね。彼に就職も進学も絶望的だって言ったださ。しかしそれが自殺に追い込む事になるとは。」

これを聞いた健は体が熱くなるのを感じた。日記遂行ではなくとも殺意が芽生えるだろうと思った。

そしてもつと詳しい情報が欲しかったため次の質問を問いただした。「家庭事情とかは？」

杉浦はすぐに答えた。

「父親がエネルギーって電気会社の社長だよ。しかし、その社長から虐待を受けてたんだ。純也は。」

「それも知ってて無視した。社長だしな。口出しできない。母親は5年前に殺されたと思う。」

社長か。有力な手がかかりだ。母親はやっぱりこの日記を読んだ誰かが殺したんだな。

それで日記の文面が更新されたんだ。

新たに健は質問をした。

「いじめをしてた奴はどんな奴だ？」

「青山って奴が首班のグループだったと思う。彼には誰も逆らえなかったんだ。」

「これもいじめを見てみぬフリをした理由の一つだ。」  
もつとだ。もつと情報を。

「どこに住んでいる？」

「確か結婚して、三河の方に引っ越したんだ。一年前に同窓会であつたよ。」

1年前かつい最近だな。

「どこの会社に就職してる？」

「確かトヨタの三河地区工場現場で働いているらしい。」

杉浦は少し改まって聞いてきた。恐々とした顔をしている

「そんな事を聞いてどうするんだ。」

・・・

自分がコントロールできなくなった。何だこの感覚は。体が思うように動かない。思想もなにも働かない。体をのつとられたような感じだ。

「殺すんだよ。先生。」

え。俺が喋ってるのか？

「みんな殺すよ。僕をいじめた奴らみんな。」

健は恐怖を覚えた。体が動かない事、勝手に思考とは逆に物を話す事、理由はいろいろあるが、一番はその言葉の内容に恐怖を覚えている。

「仕返しさ。先生。いろいろありがと。」

やめろ！！！！！！

・・・

あ、体が動く。思想も口も動く。

「あ、あ、い、う」

言葉もでる。

呪縛から解かれたと安心した瞬間杉浦の死体が目の前にあった。うわあああ

健は叫んだ。

「生き延びてやる」

1989.7.2 杉浦先生・死

「先生ならなんで僕の事助けてくれなかったのさ。」

「苦しかったのに。大学も行きたかったよ。勉強も頑張ったのに。なのに就職も大学進学もできないなんて酷いよ。」

「罰を受けるべきだよ。次生まれ変わったらいい先生になってね。」

日記が書き換えられていた。

それを見ても、もはやなんとも思わなかった。

殺すとは意気込んでたものの、実際に死体を見て、激しい後悔と無念を感じた。

この死体をどうしようか考えた。この空き地には誰も来ない。

しかし、事務官が何日も学校に来ないとなると、すぐさま捜査が入る。

第一に疑われるのは東京ＪＰＨ新聞の渡辺だ。

健は実際に存在する人物を犯行の偽名に使った。

健への結びつきの時間を遅らせるためだ。健は諦めていた。

刑務所に入っても仕方ないと思った。

しかし日記を完全に遂行させるまでは刑務所に入るわけには行かなかった。

死体は空き地の奥にある木々の土を掘り起こして入れた。

スコップは空き地の倉庫を壊して手に入れた。

死体発見を遅らせるために深く掘り死体を隠した。

これで当分は死体は見つからない。当分は健への結びつきは遠ざかるのではないかと思った。

しかし死体を埋めると先ほどとは逆に気持ちにゆとりが出てきた。  
これで二日間の休息が得れる。

三日目からはまた周辺の間人一人ずつ死んでいくが、

それまでに青山と桐山社長の詳細を突き止めて殺せれば問題はない。  
そしてつかの間の間の安らぎを得るために家に帰った。

落ち着ける空間のはずの自分の部屋に入ってもちつとも安らいだ気  
持ちにはならなかった。

気を落ち着かせようと何度も深呼吸をしてみたりしたが、生まれて  
初めて見る死体や、

体に乗っ取られた恐怖を体験し、安らぎを求めるはずの2日間はともじやないけどそんなものは求められないと改めて実感した。

パソコンの前に座り、頭の整理を始めた。

今日杉浦を殺して、三日連続で身の回りの人間が死ぬ怪奇現象はストップするはずだ。

しかし三日後にはまた新たに周りの人間が死んでいく。

その三日後に誰かが死ぬ前に青山か桐原の親父を殺しておきたいものだと健は考えていた。

青山は三河のトヨタの地域工場現場で働いているんだよな。

それならすぐに場所はつかめる。

問題はもう一人だ。桐原の親父はエネルギーの社長。エネルギーはかなりの大手企業だ。

そんな社長を殺すなどと無理難題極まりないと思った。

しかし殺すしかないのだ。もう親しい人間が死ぬのは嫌だしまだ死にたくない。

なんとしてでも生き延びてやる。

## 第四話

「知ることから」

健はつかの間の間の休息を家で過ごした後、すぐさま青山の犯行の事を考えていた。

健はさつそく青山が住んでいる三河地区に行く事にした。

三河地区までは電車ですぐにいける。タクシーでは時間がかかる。

健はパソコンで三河地区工場の住所を調べた。割と規模の小さい工場だ。

これならすぐにでも青山を見つけれられると思った。

まずは状況を把握しなければならなかった。青山という人間がどういうものなのか。

殺す状況まで持つていくにはいろいろと対策が必要なのだ。

親の留守のまに母親専用の引き出しからキャッシュカードを抜き取った。

健専用の口座が作っており、暗証番号は0702。健の誕生日だった。おそらく100万以上の金があると思う。

親が大学進学 of 足しにとためたものだ。

ここ数年ほとんど健に関涉しない親はそんなこと忘れていると健は考えた。

だからカードが無くなっても気づかれないと思った。

健はこの先かなりの金が必要とふんでいた。

少なくとも杉浦を殺すのに、結局使わなかった警察手帳やら、タクシー代やらで結構の額の金を使ったからだ。

キャッシュカードを持ち、駅へ向った。電車に乗るのは小学生依頼だとふと思いついた。

乗り方は一応知っている。そして切符を買い、豊橋方面の電車にのり、三河を目指した。

電車内で青山の事を考えた。これから俺は、青山の生命を絶ちに行

く。

青山の家族の事を思った。一家の主が殺されるのだ。残された子供は同情の目を受けて一生を過ごすだろう。

俺みたいな命と家族を支える命。果たして価値観があるのはどちらだろうか。

別に死んでもいいと少しずつ思い始めたときだった。

前に座っている人の新聞記事が目についた。

「中学生教師、事故死」

そこには先日、健の恩師の記事が書かれていた。

先生・・・

先生は自分のせいで死んだんだよな。

もうこれ以上好きな人を死ぬは見たくない。

引きこもってから人付き合いはほとんどない。

両親にもほとんど見捨てられている。だけど死んで欲しくない。親だから。

俺は好きな人を守るために青山を殺す。

そう思想を凝らしているんな事を考えていた時、

「まもなく、東岡崎。」

三河地区に到着だ。

健は腰をあげて、電車を降りた。

「青山と言う人間」

安城市、知立市、岡崎市などいくつかの市が集まって出来ているのが三河地区。

健は岡崎市のホテルにチェックインした。

まだ周りの人間が死ぬまで二日あるとはいえ、のんびりとはしていられなかったが、計画もなしにこっちにきて、何をすべきか何も浮かばなかった。

だから今後計画はホテルで立てるつもりだった。

まずは、青山を調べなければならない。

そう思い、少し部屋で休んだあと、 unnecessaryなものは部屋に置いてホテルを出た。

そして、青山が勤めている工場へ向うため、タクシーを呼んだ。

タクシーを乗る回数がこの現象によって増えたなとふつとどうでもいいような事を考えた。

「トヨタ三河地区工場現場へお願いします。」

「わかりました。」

そういつて、タクシーを発進させた。

30分で工場まで着いた。想像より少しばかり大きく感じた。

工場内を歩き、工場の雰囲気確かめるかのような動きで探索した。人が結構いる事に少し抵抗を覚えたが、今の時点何にも怪しい行動はしてない。

大丈夫だと自分に言い聞かせるように歩いた。

そしてある、一枚のボードを発見した。

そのボードは格現場の割り振り表だった。

A班、B班と、別れていて、A班に青山の名前があった。

A班5人の名前が書かれていて、名前の横にプレスと書かれていた。あたりを見回した。おくのほうでプレスを動かしている人だからがある。あの中に青山が。

昔、高校の工場体験でプレス打ちを見たことがあったからすぐにわかった。

その人だかりに近づいていった。作業着には名札がしてあった。

いた。青山だ。すぐにわかった。

そのときだった。

「おっと、見学社会？」

横の作業員に声を掛けられた。

青山もこつちを見た。

その時瞬時に目が合った。まさか目の前にいる男がこれから命を奪いに来るとは夢にも思わないだろうと思った。

質問にはとつさに

「はい。来春からこの会社でお世話になるつもりです。」

「そのための見学です。ホームページに見学自由と書いてあったので。」

とつさにありきたりな言葉をつなげた。

「そうかそうか。じっくり見ていくといい。こんな工場にも入りたい人がいるんだな。」

中年顔の作業員が笑いながら言った。もちろん健は別にこんな工場に入る気なんかさらさらない。

「しばらく見させていただきます。」

「おう。そこらへんにイスがあるだろ。腰掛けな。」

「ありがとうございます。」

イスに座ってプレスの作業を延々と見ていた。そして青山に喋りかける機会をうかがっていた。

その機会はすぐに来た。

ベルが鳴った。するとプレスは止まり、いっせいに従業員が動き始めた。どうやら休憩らしい。今だと思った。

「すみません。」

青山に喋りかけた。

青山は戸惑いの色を見せたがすぐに返答した。

「おお。どうした？」

「あの、いろいろ聞きたい事あるんですけど、いいですかね？工場の事で。」

「全然いいよ。どんどん聞いてきてくれ。」

青山は明るい性格らしい。馴染めそうだと健は思った。

他人の35歳の男性と喋るなんて行為は前の自分に想定して想像したら、考えられなかった。

ありえなかった。

しかし今は違うんだ。喋れている。

このもつとも愚かで悲惨な状況に、健は自分の事を成長したと思っ

た。

「あの、いつぐらいから会社に勤めてるんですか？」

どうでもいい質問で様子を見ようと健は考えた。

「ああ、高校卒業のときだから18かな。名古屋に住んでただけど、就職を期に引越したんだよ。」

「それでこっちで結婚して家庭を持ったよ。」

「そうなんですか。僕も名古屋に住んでるんですよ。奇遇ですね。

俺もこっちに来ようか迷ってるんです。」

もちろん青山の状況は杉浦から聞いて把握していた。いつからか健は人をだます演技もこなせるようになっていた。

「そうなの？奇遇だね。すげえじゃん。お互い同じ境遇に立ちそうだね。都会暮らしたたから、こんな田舎来ると全然生活感が変わっちゃうよ。」

同じ境遇か。俺はお前を殺さなければ自分が死ぬ。ある意味同じ境遇かもな。

よく喋って嬉しそうに話をしている青山に健はある事を言ってみた。  
「あの、よろしければ、今後の参考までにいろいろとお話を聞きたいななんて。」

明日もこの工場くるつもりなんで。同じ名古屋出身って聞いて嬉しくて。

ずうずうしいんですけど・・・お酒なんかどうですかね。もちろんおごりますんで。」

ちよつと欲がでたか、焦りが出たか、発言してみても少し後悔した。  
初対面を飲みに誘う大胆さはかつての健にはなかった。冷静になれ。  
「おお。大きく出たね。いいよ。よろこんで！みんなも誘っていい？」

了解を得てしまった。健は驚いた。ツキは向いてきていると思った。

「いいですよもちろん。」

「じゃあ5時に終わるから少し待ってて。」

「はい」

時刻は4時を回っていた。工場を歩いて暇をつぶす事にした。

いろんな機械が置いてあって、なんとなくオーケストラのような機械の音のコラボレーションのように聞こえてきた。

そして働く人を見て、引きこもって、ニートの生活を送っていた自分を重ね合わせるととても悲しく思えた。

工場見学はこんな状況でもかすかに楽しいという感情が芽生えた。あつという間の30分のように感じた。

5時になり、プレス機の近くに帰った。機械が止まっている。仕事は終わったらしい。

「おう。見学者。またせたな。」

プレス機の方から青山がやってきた。

「近くにつまみが美味しい居酒屋があるんだよ。いつもみんなでそこに行くんだ。連れてってやるよ。」

「そうですか？ありがとうございます。」

青山を見ると辛くなった。いい人じゃないか。この人は。

初対面の見学者を飲みに誘うところなんか、とても陽気でやさしい。健は心苦しんだ。

青山と並びながら工場を出て、左に曲がったところに駐車場があった。

「乗れよ。」

青山が言ってきた。飲みに行くのに車かと少し疑問をもったが、潔く車に乗った。車の中には子供臭い、イスのカバーやアニメキャラクターの人形まで後部座席に置いてあるのが目に付いた。

一家の父親って感じがした。

「お子さんおいくつなんですか？」  
健が青山に聞いた。

「えっと、小学校2年だから、6歳かな。」

「そうなんですか。さぞかし可愛いんでしょうね。」

「可愛いよ。何しろ俺の娘だからな」

嬉しそうに話す青山の話を聞くと心が少しだけ休まる感じがした。

いい家族なんだろうな。

世間話をしながら車を走らせ、居酒屋の駐車場に車を止めた。そして居酒屋に入った。生まれて初めて入る居酒屋。少しばかりの緊張を覚えた。

「おお青さん！元氣かい？」

「まあな。」

そういうと青山は健の肩を持った。

「こいつ、来春にうちの工場に来る見学者だ。名前は。えっと」

「榊原健です。」

「そうそう。健だ。よろしく頼むぜ大将！」

「おっし。わかったよ。よろしく健！」

暖かかった。初対面なのにやさしく接してくれる。

「大将。これ駐車場の料金ね。明日の朝に取りに来るよ」

「へい。」

そういうと青山は大将に千円渡した。

青山はこの駐車場に車を止め居酒屋から駅まであるいて、電車で家に帰るという。

飲む日はいつもそうしていると言う。

居酒屋から駅までは2キロほどあるらしい。その間はふたりきりになるチャンスだ。

それを聞いて、健の頭の中にシナリオが出来た。

犯行は明日行う。そのために今日のふたりきりの時、場所を指定して、待ち合わせの約束をしよう。

明日青山を殺す。殺さなきゃならない。

健は複雑な気持ちで青山達の中に入っていた。

居酒屋では盛り上がった。健が初めての酒だと言うと馬鹿にされたが、みんな笑ってくれてたからよかったと思った。

これから残酷な事が起こる前触れのような、笑い声が響き渡った。このとき健は本当に楽しんでいて、青山と言う人間を好きになっていた。

そしてみんなが飲み終わり会の終わりを迎えた時に健は

この人を殺したくないと思った。

「殺人予告」

飲み終わり解散したあと、駅まで向う2キロの距離をふたりで歩き始めた。

暗い坂道を並んで歩いている。

青山はいい人だ。明るい家庭を持って、楽しい従業員の仲間がいる。こんな人の人生を俺がつぶしていいのだろうか。

これまで何度も青山の事を考えたが、今度ばかりはその重圧に耐えれなかった。

「新入り！お前面白い奴だな。俺の家寄ってくか？」

家に誘われた。嬉しかった反面悲しくなった。俺に優しくするなと反発気味の感情を持った。

「いや、今夜はホテルを取ってあるんで帰ります。」

「そうか。いい後輩を持てて俺は嬉しいよ。」

「僕もです。先輩。」

「おお。生意気にいつちゃって。」

笑いながら話す青山の表情を見て、諦めた。俺はこの人を殺せない。もうどうなってもいい。この人が俺のぶんまで生きてくれる。そう思ったときだった。

「なあ新入り。自分の命より大切なものって何だと思う？」  
え？

「俺はな、どんな人にも命をささげる勇気がある。」

俺もその勇気はある。だから俺は先輩の代わりに死にます。

「俺が幼い頃、不良で荒れててさ。親とか何もかもうざくて。いじめもしてたんだ。」

・知ってるよ

「そのいじめでいじめてた奴が自殺したんだ」  
うん。

「その自殺を知った時、俺は思った。」

・・・

「どんな酷い奴にでも命ごいされた奴は助けてやる。

たとえ家族を皆殺しにして、自分も死のうとする犯人がいて、その犯人の代わりに自分が死ぬとしても俺はそれを後悔しない。」

え？

「馬鹿だと思うけど、俺は一度命を捨てたんだ。

どんな幸せをもってたって、その幸せを一瞬でなくせる勇氣がある。

」

「一個の命の為なら自分の命なんていらないよ。」

青山は続けた。

「ってごめんな。変な話しちまってよ。ばかばかしい。お前見てると自殺した奴のこと思い出しちまった。」

青山は健を桐原純也に重ね合わせてその話を切り出したのだろう。

健は自分の感情がなくなるのを感じた。

不気味だったが、意識ははっきりしていたのに自分じゃないみたいだった。

決心がついた。青山の言葉を聞いて。

坂道の暗闇で健は止まった。

「・・・先輩。」

「なんだ？」

重い口を開いた。

「俺、桐原純也の弟だよ。」

「・・・え？」

嘘だった。

「青山さんを探しに来たんだ。」

「そんな馬鹿な話が。」

そして杉浦にもついた嘘を二回続けて使った。

「遺言があるんだ。青山さんに伝えるための」

「本当か？」

「だから明日の夜10時にここに来て。一人で。あんまりこの事を周りの人に広まらせたくないんだ。」

だから秘密に一人で来て。」

健はある公園の住所が書いた紙を青山に渡した。

「・・・わかったよ。行くよ。まさか、お前が弟だったとはな。」

青山は下を向いた。

「俺を恨んでいるか？」

聞かれた。健は首を横に振った。

「もう忘れたよ。」

そういつて健は青山に背を向けてホテルへ向った。

ホテルの部屋のベットで大の字になって天井のかすかな染みの一点をずっと見るようにして、心を乙つかせた。

静かだった。何の雑音もない。聞こえるのは自分の鼓動の音だけ。

健は泣いていた。とうとう青山に自分の描いていたシナリオどおりの事を言ってしまった。

明日、いや今日青山を殺すんだ。時刻は12時を回っていた。

健は立ち上がり、イスに座って、頭の整理を始めた。

「殺害準備」

青山には桐原純也の弟だと嘘をついた。それを信じているようだった。

この嘘をつくことはふたりきりになった時に思いついた。

いい案だと自分は考えた。

まさか自分が殺されるとも知らずにこの待ち合わせ場所の公園にく

るだろう。

誰にも言わずに。言えるはずがないと思った。いじめで殺した奴の弟と会うなんて。

周りからどんな目で見られるかわからない。

それを思うと言えないはずだ。それに誰にも言うなと口止めもしたし。

だから明日の待ち合わせには障害物は何一つないと思っていた。

ふたりきりになれる。内密に。

そこからどうやって殺すか。

待ち合わせの公園は前回同様周りに住宅がない。

だから悲鳴が誰かに聞こえるとは思えない。

しかし、公園内に夜10時、人がいたらどうするか。

いるはずがないと踏んでいた。この公園は何もないのだ。

ただ公園と呼ばれてるだけで、何もない。

ほとんど暗闇で若いカップルもまず怖がって来たからないだろう。

いるとしたら変質者がホームレス。そんなものはどうにでもなると思っていた。

変質者には警察手帳。ホームレスは口止めで何とかなる。

それにこの口実は警察に捕まるための時間稼ぎだ。

健はもう警察に捕まる事はなんとも思っていないかった。

とりあえず、遂行が終わるまでに捕まっては、社長を殺すなど絶望的だ。

一応、カツラとくろぶちめがねと帽子をかぶっていこう。

この殺しに失敗したらもう何もかも終わりだ。失敗は許されない。

だから死ぬ人間になんと思われてもかまわなかった。

あとは、殺す為の道具だけだ。しかし、もうその心配はなかった。

健の最大の武器はパソコン。

実は拳銃が買える裏サイトでサイレンサーの拳銃を30万円で購入したのだ。

杉浦犯行の翌日、拳銃を注文し、さつきホテルの従業員が一通の封

筒を運んできた。

封筒を開けると、手紙と鍵が入っていた。

「岡崎駅が近くにあるはずだ。コインロッカーに物を取りに行け。」と書いてある。

これで道具はすべてそろった。

後は、精神力だ。好きな青山、そして青山の家庭、そのすべてを壊すだけの強い精神が果たしてあるのだろうか。

気づいたら朝を迎えていた。犯行は今夜の10時。

9時にホテルを出て、町を時間までぶらつくことと思った。

もちろん今日は工場見学には行かない。青山の目が気になるし、何しろあの暖かい空間が健には苦しかった。

知らない町岡崎市。中学の時以外、地元から出た事がなかった。だから岡崎の町は知らない世界のようなだった。

今夜が日記遂行だと言うのに、健は悠長な事ばかり考えていた。

しかし、健は休める時がほとんどなかった。体じゃなく精神のほう

が。

いつも殺人の事ばかり考え、普通の精神力の人間では耐えられないだろう。

しかし健は、この奇妙な体験を前にして、大抵の事ではびくつかない精神力を養えていた。

健は漫画喫茶に入った。

そしてパソコンを触り始めた。

杉浦の記事を探した。もし家族や、事務員が杉浦の会社してこない事を気がかりに捜査願いを出し、

死体が発見された場合、絶対にニュースになる。しかし記事は見つからなかった。

まだ杉浦を殺して二日目だ。そう簡単に事件になるわけがないと改めて考え直した。

しかし杉浦がバレルのは時間の問題だ。

おそらく今週中には家族から捜査願いが出され、死体発見がされる。

そして警察は調べるだろう。重要参考人を。まずは東京の新聞記者だ。

健が偽名を使ったからだ。

それから事務員に取り調べが行き、目撃証言を聞かれるだろう。茶髪とクロぶちめがねが印象的だ。それをまず警察に言う。

この調子だと、自分に結びつく手がかりは時間がかかると健は考えた。

親は健の事何も関渉しない。だから行方を暗ました事は気にしないのだろう。

しかし、キャッシュカードがなくなった事や、2日も家に帰らない事がわかり、通報でもされたら、

杉浦と結びつくのはあつという間だ。

だからホテルで親には電話を掛けた。

親はやはり健の事は気にしてはいなかった。

それどころか外出していた事も知らなかった。ずっと部屋にいて思っていたらしい。

キャッシュカードを抜き取った事も伝えたが、別にその事も気にしてはいなかった。

家の事は人安心だ。

漫画喫茶で暇をつぶし、レストランで夕食を済ませた頃には夜の8時になるうとしていた。

目的地に行き、人が来ないか見張るために、早めに待ち合わせの公園に向った。

電車で2駅だ。

そして公園に着いた。ほんとに何も無い。ベンチが一個あるだけ。遊具もない。少し離れたところにマンションが建っているのがわかる。

それ以外に住宅らしい住宅はなかった。少し先に林があった。

ほとんど空き地に近かった。なんでこんな所を作ったのか。

人がこんな所に来るはずがなかった。

2時間待っても人ひとりも来なかった。

無駄な心配をしたと思った。

約束の時間まで残り10分。鼓動が高鳴る。本当に来るのか。来て欲しくない。

殺したくないから。

そういう気持ちと、

来るだろうか、早く来てくれ。と言う気持ちが対立しているようだった。

「青山殺害」

10時15分になり、奥から人影が見えた。序所に近づいてくる。青山だ。健に緊張が走る。

「なんだその格好は。カツラにめがねなんかしちゃってさ。」

「別に何でもいいじゃん。」

やはり健の衣服に青山は注目した。

しかし別に対それたことにはならなかった。

「まあいいけどな。」

そういうと少し悲しそうな表情を出しながら横を向いた。

「お前、純也の弟なんだろう？何か兄貴死ぬ前に何か言ってたか？」

「黙っていなくなつて、遺言書が置いてあつただけ。」

少し黙り込んで青山は言った。

「悪かつたな。」

桐原と青山の关系到自分は関係ないことだが、他人事のように思えなかった。

「もう良いつてそのことは。」

それから桐原は意外な質問を聞いてきた。

「榊原健つてのも嘘で工場に来るつてのも嘘なんだろう？純也の弟つて事は、結構歳いつてるはずだからな。

何しろ17年前だから。」

健は最大のミスを犯した。

歳のことをすっかり忘れていた。血の気が引く。しかし意外な反応を見せた。

「別に歳のこととかどうでもいいんだ。お前が嘘をつこうがつかないが俺には関係ない。」

俺が今日来たのは遺言を見に来たんだ。それだけだ。」

意外な反応を見せた青山に健はこうつぶやく。

「遺言か。それならないよ。」

青山は啞然とした。

「どういうことだよ。」

疑問を抱くように聞いてきた。

健は決意した。そして、殺人を実行する時がきた。

健は青山にサイレンサーの銃を向けた。

「どういうことだ？」

青山は落ち着いている。なんでこの局面に立たされて、冷静でいられるのか不思議だった。

「俺はあんたを殺しに来たんだ。」

青山は青ざめるように健を見つめていた。

「俺があんたを殺す理由は別にある。桐原純也は関係ない。」

「なんでまた。」

「俺はあんたを殺さなきゃいけない理由があるんだ。」

そういうと健はゆっくり引き金を引いた。辛かった。今にも涙がこぼれそうだった。

青山がつぶやいた。

「殺せよ。」

え？

「早く殺せよ。」

疑問が頭をよぎる。混乱した。

「俺はもう別に命の未練なんかないんだよ。純也とお前が俺が死んで助かるなら本望なんだよ。」

「なにいつてんだよ。」

急に殺意がなくなった。何かなんたかわかんなくなった。

「俺はもう純也の事を後悔しながら生きて行くのは少し疲れたんだ。俺はお前が好きだよ。いい後輩だと思う。」

まだ知り合って2日だけど、何かを感じるんだよな。

俺が死ななきゃお前は苦しむんだろ？」

それを聞いてこみ上げてくるものがあつた。拳銃を床に落とした。限界だ。

「俺には無理だ。青山さんが俺の代わりに生きてくれ。」

そついい残すと、公園を出ようと青山に背を向けて歩き出した。ゆっくり歩き出した。

そのときだった。

「弟！」

呼ばれて振り向いたら衝撃の現場を目にした。

青山は自分の頭に拳銃をつきたてていた。

「なにやってんだよ。」

健は愕然とした。

「俺は純也のためなら死ねる覚悟があるんだよ。」

健は懸命に言い張る。

「だから純也は関係ない。俺は弟でもない。あんたを殺すための口実だ。」

一生懸命説得をした。さつきで殺人を犯そうとした人の発言とは思えなかった。

「そんな事知ってるよ！」

そつつぶやいた。

「純也に弟なんていないよ。」

え。最初から知っていたのか？ならなんでここに来たんだ？その答えはすぐに出た。

「お前が思いつめてるのは一瞬でわかった。最初からな。相談に乗ろうとしたが、純也の事が出たから、何かあるんだと思っ

たよ。

だから来て見たらこれだ。」

ありえないシナリオが待ち受けていた。

やめる！！！そう叫んだ時だった。また操られる感じがよみがえる。

駄目だ！助けてくれ！俺の体をもてあそぶな！

そう強く思っても体や口が勝手に動く。

「青山。」

健の雰囲気が一瞬で変わった事に青山は気がついた。

「どうした？」

「俺、純也だよ。あんたにいじめられた。

あんたにされた事は鮮明に覚えてるんだ。教室でカッターナイフで体を刻まれた。

図工の時間だといって。先生は止めなかった。杉浦は殺したよ。次はお前だ。」

青山は驚愕の表情をしている。

「なにいつてんだ。お前がなんでその事知ってる？」

健の体を借りた桐原純也は喋り始める。

「俺が健の体を借りているんだ。」

信じられないと言う顔をしている。

「そんなばかな。。。でもそうしか考えられない。」

桐原はさらに追い討ちをかけた。

「さあ死ねよ。」

青山は死を覚悟する顔になった。開き直ったように。

「それでお前の気が住むならな。最後に一言だけ言わせてくれ。」

青山がつぶやいた。最後の言葉だ。

「ごめんな。純也。」

そういうと青山は引き金を引いた。

・・・呪縛が解けたんだ。

目の前には青山の死体が転がっていた。

また、前と同じ状況だ。勝手に俺の体を借りて勝手に殺した。お前はいつたいなんだんだ。俺の中に入ってくるなよ。

健は泣き叫んだ。人に響く事のない孤独な叫び声を。

青山の一生をも終わらせた。

公園を後にし、駅に向った。切符を買い、電車に乗り込み、ホテルへ向った。

この明るい電車内で健一人が別世界にいるようだった。

下を向き、絶望に浸る。

なんで俺は生きてるんだ。死ぬってなんだ。もう良くないか。疲れたよ。

電車に揺られながら、気づいたらホテル前の駅に付いていた。

ゆっくりした面持ちで電車を折り、駅を出て、ホテルへ歩き始めた。ほとんどこれらの行動が無意識だろう。

何にも感情がわいてこない。そして健がふっと気づいたらホテルの前に立っていた。

ホテルで鍵をもらい、暗闇に包まれる部屋へ入った。

暗闇は日記遂行が始まってから好ましくなかった。

引きこもっていた時とは逆に、部屋を明るくし続けていた。

健はゆっくりとベットの上に腰を下ろした。

・・・公園から帰ってきたんだよな。実感がわかない。今もあの公園にいるようだ。

健は自分の手をゆっくり見た。手は少し血の跡があった。

こみ上げてくるものがあつた。段々と現実に取り戻されていくようだった。

涙が出てきた。止まらない。

何で殺してしまったんだ。あの青山の家族はどうなるんだ。

なんで操られるんだ。桐原純也っていつたい何者なんだ。

なんで俺の体に入ってくるんだ。なんで俺だけこんな仕打ちを受け

るんだ。

別に悪い事は何一つしてなかったじゃないか。

二トが悪いのか。神が与えた罰なのか。別に仕事をしなくてもいいじゃないか。自分の勝手じゃないのか。

・・・仕事もする。大学にも行く。親にも迷惑をかけない。だから俺を助けてくれ。。。

悲痛の心の叫びを健は訴えていた。誰にも言えない。相談も何も出来ない。一人で抱え込むしかない。孤独だ。

# 「無意識」

健は何も行動せず、何も考えず、ベットの上で座り続けた。人形のようにほとんど動かなかった。

気づいたら1時を回っていた。ホテルに帰ってきて、3時間近くほとんど無意識の状態だった。腰が痛かった。涙がひいていた。

思考回路が回復したようだ。感情も並行に保ててる。

健はゆつくりとだが、今日起きた出来事を考え始めた。

青山は殺した。あとは桐原社長を殺せば呪縛は説ける。青山は予想外の事に自殺をした。

警察も即座に、自殺か他殺かの区別はつくはずだ。だから青山の死亡に付いては、別に問題はないと思った。

それより、杉浦や青山の前で起きた現象はいつたいなんだ。

急に体が言う事をきかなくなって、勝手に喋り始める。

健が思いもしない事を。

そして段々と意識が遠のいていくんだ。まるで何者かによって乗っ取られるかのように。

桐原純也の霊が恨みをもって、自分の中に入ってくるのだろうか。そんな霊とか、おばけとか、今まではまったく健は信じていなかった。

幽霊はプラズマだって証明できる事も知っていた。

しかし、実際に桐原純也の霊が自分の中に入ってくるのを体験し、嘘とは思いたいけれどもこういう事が実際にあると認めるほかなかった。

何とかしなければ。そう考えながら健はベットに入った。

眠かった。体も心もつかれきっていた。人生で一番悲しい日だった。部屋ですやすやと眠る過去の自分を思い出すと情けなく感じてきた。これからの事は明日決めよう。早く現実から逃れたい……。健が眠りにつく頃には2時を回っていた

## 第五話

「地元の安心感」  
ブルルルル。

何の音だ。電話か。鳴っていいの。出なきゃ駄目だろうな。体が重いのを我慢してベッドを立ち上がり電話に出た。

「11時です。まだチェックアウトしませんか？」

もうそんな時間か。健は時計を見た。本当に11時だった。

「します。12時に出ます。」

「わかりました。失礼します。」

そして電話を切った。ほんの少しの会話にも疲労を感じたのがわかる。人とかかわりなくなかった。

ベッドに戻るとしばらく横になって考えた。また緊張の一日が始まる。時間が止まって欲しいと思った。しかし、無情にも時間は進む。家に帰りたい。パソコンを触りながらこれからの事を考えよう。

それまでホテルで12時までゆっくりしよう。

健は目をつむった。

暗闇だ。とても深い。

青山さん。先輩の分まで生きてやるから。

この日記遂行が終わったら、青山さんの会社に本当に勤めにいくよ。そして青山さんの家族のフォローをしたい。安心して成仏してくれ。目を開けると早くも11時50分だった。健は少ない荷物をまとめ部屋をでた。

そしてカウンターに会計を済まし、ホテルを出た。  
振り返った。

ホテルに泊まるのは小学生以来だった。

あこがれていた。しかし家族で旅行する事もめったにない。

ホテルを利用する事などこの先あるかわからないと健は考えていた

がまさかこんな形で利用するとは夢にも思わなかった。

今度は楽しい思い出をこのホテルで過ごしたいと思った。

ホテルに背を向け駅へ歩き始めた。

家に一刻も早く帰りたい。切符を買ったとき、

「まもなく名古屋方面快速急行、岐阜行きが到着します。」

アナウンスを聞いて、健は走った。そして駆け込み乗車をした。

少し息が上がっている。

健は地元名古屋に着くまで30分間立ちながら外の風景を眺めていた。

電車はやっぱ早い。あつという間に風景が流れていく。

山が見えて、河が見えて、民家が見える。あそこには大きなタワーがある。

観覧車もあるんだ。

風景を観察しているうちにアナウンスがなった。

「まもなく、有松、有松。」

健は少し余裕が出てきたのだろう。

青山が死んで、ショックが大きくて、落ち込んでいたが、今は平常心だ。

たまに青山の事を考えるが対して思い込まないまでになった。

駅を出て、徒歩10分のところに家がある。

見慣れた風景だ。見慣れた家、見慣れた木、見慣れた市役所。

地元に戻ってきた。短い期間だったがかなり地元から離れていた実感を感じた。

家が見えてきた。一安心した。

玄関を開けた。鍵はやはり掛かっていない。無用心だ。

そして急ぎ足で階段を上り部屋に入った。

もつとも安心できる風景が広がった。

大の字になってベッドに倒れこんだ。

つかれた・・・

「闇の住人」

部屋のベッドは気持ちよかった。  
やっぱり部屋は落ちつく。

ずっと感じていた緊迫した緊張感が序所に安らいでいくようだった。  
このままずっと寝ていられていたらどれだけ幸せか。

そう考えた時、思った。自分は変わらなければならない。  
死んでいった青山や杉浦のためにも。

前みたいにニートの生活に戻るのは絶対に駄目だ。変わるんだ。  
そして、健はベッドから立ち上がり、パソコンへ向った。

ニュースを検索し、青山の記事を探した。  
2日で100近くの事件があるんだ。この世の中怖いものだらけだと感じた。

・・・あつた。青山の記事だ。

「岡崎市藤川町の川口公園で作業員青山強（36）が拳銃で自殺。  
動機や詳しい事情はまだわかっていない。」

この記事を見て、軽く混乱した。  
目の前にあるニュースに自分が関与しているなんて信じられなかった。

芸能界、テレビ、ニュース、自分にはまったくの無関係だと思っていた。

少なくとも今までの健には無関係だろう。

青山の家族が気になった。

事が片付いたら会いに行こう。

しかしそれは無理かもしれない。次で絶対に捕まる。  
社長殺しなんて素人に出来るわけない。でも刺し違えても社長だけは殺す。

桐原社長の殺害計画を考えた。

殺人へ残された時間はあと二日。そして三日からはまた周りの人間が死んでいくのだ。

のんびりはしてられない。一刻も早く計画を立てて実行しなければ。しかし案が思いつかない。

「裏の住人」がチャット仲間にいる。聞いてみるか。すると健はパソコンを起動させチャットの画面を出した。

「チャット内容」

けん〓ゴメン寝ていたかな？

りゆう〓別に。てかお前この頃外出しているのか。ニートの癖に。

けん〓なんで知っているの？

りゆう〓様子でわかるよ。パソコンをログインしない日が続いただら？

お前は家族に関わりをもってないから、家の用事でパソコンが使えないなんてないだろ。

そうなると外にいる以外ないだろ。

けん〓へえ。よくわかったな。

りゆう〓余裕だって。ていうかなんか相談あるのだろ？

わざわざ久しぶりにログインしてきて、いきなりチャットを誘うくらいだからな。

けん〓そうなんだよ。ていうかりゆうは、やくざ関係の仕事をしているのだろ？裏の人間って訳だ。

りゆう〓裏というか、正しく生きるのに飽きただけ。

けん〓そんなりゆうに相談があるんだ。

りゆう〓ニートなんかの頼みは期待できないな。

けん〓もうニートはやめるかもしれないな。それぐらいの状況に追い込まれた。訳は言わないけどな。

りゆう〓興味できたな。予想だが、外出中に起きた出来事だら？けん〓そうだ。

りゆう〓ニートが外になんかでるからだ。

けん〓いろいろあるんだよ。

りゆう〓もういいから早く内容話せよ！

けん「このチャットは完全に監視の目とか気にしないでいいんだよな？」

りゅう「当たり前だ。でもそんな事気にするあたりがよっぽど凄い出来事なんだろうな。」

けん「エネルギーの社長を殺すんだ。殺し方を相談しに来た。出来るだけ俺との結びつきを遅らせる。」

りゅう「ｗｗ」

けん「マジだぜ」

りゅう「・・・」

けん「いろいろと訳があるんだ。二トの大冒険って奴だ。なんで殺さなくちゃいけないかはいえない。俺の命にかかわる。」

りゅう「しねよおまえ。」

けん「どうしたら信じてもらえる？」

りゅう「しょうこを見せろ。」

けん「わかったよ。じゃあ中川区の笠月の空き地に行って、土管の横の一番大きい木を掘り起こしてみろよ。死体が埋まっているんだ。」

りゅう「すぐ近所じゃないか。」

けん「見に行けよ。」

りゅう「わかった。もしあったら拍手してやるよ。なかったらお前のパソコン壊して、お前のプライベートを全世界に公表する。脅しじゃないぜ。」

けん「上等だ。」

「りゅうという人間」

りゅうがログオフして2時間がたった。りゅうは偶然にも名古屋市民で偶然にも、杉浦を殺した空き地のすぐ近くに住んでいる。りゅうが近くの中川区に住んでいた事はずっと前から知っている。杉浦がそこで死んで、あとでこの偶然に気づいた。偶然という恐ろしさ

に恐怖を覚えた。

死体はまだ発見されていないはずだ。それはいまだにニュースが公表されていないからわかる。しかし、もし死体が発見されてまだニュースが流れてないだけだったとしても、警察関係者がうるついているだろう。それをみてりゆうは健の言っていたことが本当だと気づく。

ピンポン。りゆうを待つ事3時間。パソコンがなった。りゆうがログオンしたらしい。

りゆう「どうやって殺した？」

けん「ナイフ」

りゆう「そんなのじゃ死体発見されたらお前なんか簡単に結びつくぞ。」

死体の傷口でナイフが凶器だとわかるだろう。

もし傷口から刃物に結びつく物質が万が一、発見されたら、どんなナイフが使われたかわかる。

そのナイフが購入できる場所は？近くに武器を取り扱う店は？それ以外にも現場にお前の髪の毛一本でも見つければ、DNA鑑定とかで、何歳ぐらいの毛なのかともわかる。

・・・ってまあこれではまだ詰めがあまりが、これ以上に警察は捜査してくる。捕まるのは時間の問題だ。

けん「捕まるのは怖くない。俺は社長を殺さなければならない。

りゆう「本気のようなだな。お前もこっちの世界の住人になるのか。

けん「今はそういう事になるだろうな。

りゆう「詳しい事は会って話そう。大丈夫だ。危険性はない。

けん「危険もなにも俺はお前を信用しているし、何にも問題はない。そついうとけんとりゆうはお互いが認知しているレストランで待ち合わせをした。

りゆうとは裏の掲示板で知り合った。検索エンジンにもかからなく、アドレスは特定の人物しか絶対に入手できない掲示板だ。

気が合うし、怖いけどスリルがあった。そしてメッセンジャーチャ

ットを始めた。

歳は同じ年だった。かなりのエリートコースを小さい頃から歩んでいるらしい。かなり頭がきれる。

しかし大学を中退して、裏の道へ進んだ。そんな彼を健は信頼していた。

健は部屋を出て、喫茶店に向った。やくざがらみの人間と会っのは怖かった。

よく知っているりゅうでもだ。

レストランに着き、席にすわってりゅうを待つ事にした。

「赤い丸い時計が目の前にある席に来てくれ。」

健が提案した。

レストランで水を飲みながらその風景を見ていた。人が歩いている。

会社帰りだろうか。サラリーマンが早歩きで駅方面へ歩いている。

派手な服をした女性も見える。

人を待っているのだろうか。ちらほらと時計を見ている。

その横には女子高生が3人でたまり込んで喋っている。

健に移る人はみんな穏やかそうな顔をしていた。

ちゃんと働いて、ちゃんとした生活を送っているのだろう。

なんの悩みもなさそうに見える。

いつからこの人達と俺とでこんなにも人生に差が出たのだろう。

命をとられる心配もしないで洋々と生きているこの人達と、殺さなければ殺される恐怖と日々戦っている俺。

いつから人生が狂ったのだろう。

高校卒業して、進学がめんどろで、フリーターになって、バイトをクビになって、部屋に引きこもって。そこからか・・・俺の人生が乱れたのは。おそらく、俺の残された人生は刑務所かあの世だ。

高校時代に戻りたい。

そして就職か大学に進学して、人並みの生活を送りたい。

そう考え始めるときりがないと思い、水を一気に飲み干し、考えす

ぎによつ自分に言い聞かせた。

10分が立ち、黒いパーカーでフードをかぶった男が現れた。フードの陰で顔が上手く判別できない。

「お前が健か。」

「そうです。」

恐々と答えた。

「こつちへ来い。」

そういわれると、レストランを出て、黒いパーカーの男に付いていった。

「ここじゃ目に留まるだろ。安心して喋れるところに連れてってやるよ。」

「りようか。」

「ああ。」

安心した。やはりりようは風格が違う。

健は少し恐怖を感じていた。りようとは初めて会う。

ネットの世界の人と実際にリアルで会うのは初めてだ。

よくこういう口の犯罪は起きているが、そんな悠長なことは言っていられない。

だから会うと言われたときすんなりと承知した。

りようの車にのりどこかへ向った。どこへ連れて行かれるんだろうか。

「お前も災難だな。」

「え？」

「お前命狙われているのだろ？」

りように言われたとき一瞬鼓動が高鳴るのが感じた。

日記の内容は絶対に知られてはいけない。こいつに相談するのは殺し方だけだ。

「ああ。」

「どこの組の奴だ？」

必死に健は隠そうとした。

「知らないよ。知っていたとしても教えられない。チャットで行っただろ？」

そういうとりようは少しばかり表情が曇った。しかし別に対して気にしてはいなかったようだ。

「ならいい。言わなくて。今から行くところは安心して身を隠して喋れるところだ。」

「隠し基地」

車を発進させて30分が立ち、ある大きなビルの前に車を止めた。そしてそのビルに入りエレベーターに乗った。

「ここの事は誰にも言うなよ！」

そう言うとりようはボタンを連続して5回押した。1階ボタンと3階ボタンと5階ボタンと7階ボタン。そして最後にまた1階ボタンを押した。

何やっているんだ？少し疑問を持ったがその答えがすぐに出た。

このビルに地下はない。エレベーターも地下には繋がってないし、エレベーター横の階段も上り階段しかなかった。

しかし沈んでいくのがわかる。地下に向っているのだ。

そして扉があいた。

目の前には一本の道がある。

道の横には部屋がいくつもあり、道の突き当たりに一番豪華な扉が見えた。

「俺の組の隠し基地だ。」

着いて来いといわんばかりに先に歩き始める。そしてエレベーターから見て奥から4番目の扉を開けた。

普通のホテルルームと変わらないぐらいの部屋があった。

そこにあった椅子にりようは腰掛けた。

そしておもむろに口を開き始めた。

「さあ訳を話してみろよ。何で命が狙われているのかは話せないの

だろ？それはいわなくいい。」

健は暗い表情を見せながら答えた。

「俺も話したいよ。全部ぶちあげたい。しかし俺の身の回りでおきている事はお前も信じられないぐらいの事なんだ。」

りょうは少し笑みを見せて答えた。

「よくわからんが、まあいいさ。話さなくて。」

そういうとりょうは立ち上がりグラスを二つだし、冷蔵庫からビールを一本取り出した。

「少し飲んだほうが俺は頭がさえる。」

「そうなのか。俺、アルコールは駄目なんだ。」

それを聞いたりりょうはグラスを一本しまい、缶を開けて、ビールを注ぎ始めた。

「それで、エネルギーの社長を殺すんだろ？」

「ああ。」

真剣な表情でりょうは聞いた。

「社長を殺すって事はどういう事かわかるのか？社員全員を混乱させ、財政状態をメチャクチャにするんだぞ？わかっているよな？」

それを聞くと少し鼻息を荒らし、答えた。

「もちろんだ。覚悟はとつくの昔に出来ている。」

「そうか。二トのお前がよくぞ決心した。」

少し強張った口調で答えた。

「時間がない。あと二日で殺さなければ、俺の周りの人間に被害がくる。」

日記の内容を言うすれすれの所を話している。高い崖から綱渡りをしているようだった。

「そうか。お前自身以外にも周りの人間も殺すと脅されているのか。厄介だな。どこの組かわかんないんじゃ太刀打ちできないし。命令を聞いて、社長を殺すしか道はないな。」

「どうやって殺そう。」

りょうは少し考えて、答えた。

「社長と会う事すら不可能だ。」

予想していた事を言われた。

「やはりな。」

そして次に意表をつく発言をしてきた。

「しかし、殺す事は可能だ。」

健は驚いた表情でりゅうの顔を見た。

「遠くから銃で頭を打ち抜くんだよ。」

健はむきになって答えた。

「そんな事が俺に出来る訳がないだろ！」

健は困り気味に言った。しかしりゅうは反論した

「それしか俺が考える限り殺すすべはないと思う。」

黙り込んだ。

「お前はまったくあの会社と接点がないのだろ？残り日数も限られている。これしか思いつかない俺は。」

「わかってる。わかってはいるけど。」

そういうと健は黙り込んだ。

ホテル並の綺麗に整えられている部屋の中でふたりを沈黙が包み込んだ。

引きこもりでニートだっただけの何のとりえもない俺が、狙撃なんて出来るわけがない。一発でもはずしたらもう殺すチャンスはなくなる。

そうなるともう何もかもが終わりだ。

「やつばできない。俺に狙撃は無理だ。運動とかもほとんどした事がないんだ。俺はただのニートなんだ。」

がっかりしたようにりゅうはつぶやいた。

「何だよ。殺人まで犯しておいて、その言い草はないだろ。ここまで来たのだからそれぐらい根性で乗り切れよ。」

健は反論した。

「それとこれとは別だ。これは俺の命に関わる事だ。ばくちみたいな一世一代の賭け事はゴメンだ」

「・・・わかったよ。考えてみたら狙撃なんて素人に出来るわけがない。」

りょうは少し間を置き考え込んでいた。そしてりょうは口を開いた。「ようするに、桐原社長が死ねばいいんだろ？」

「ああ。」

「うちの組の狙撃手に狙わせてもいいぜ。」

健は予想外のりょうの発言に驚きを隠せない。

「本当か？それなら助かるよ。」

「でもただでは動かないだろうな。」

健は少し落胆した。やくざを動かすネタなんて何もない。

「何すれば動いてくれるのかな？」

「それは俺もわからない。」

・・・何をしたら組が動いてくれるか。それをふたりで考え続けた。地下だから外の様子が把握できない。だから今昼なのか、朝なのか、夜なのか、時計がなくては完全にわからない。

時間は8時を示している。しかし、朝の8時といっても疑問を抱かない。

それぐらい時間の感覚が狂っているようだった。

眠気も来ない。まるで日が進まない世界で生きているような感覚だ。そんな事を考えているうちにりょうが大胆不敵な発言をしてきた。

「やくざの幹部に会わせてやるよ。待っていても仕方がない。説得しろ。」

「何を言ってる。そんな事できるわけない。」

りょうは少しいらだちを出し始めた。

「そんな事言ったら何も始まらないじゃないか！お前は死ぬんだぞ！お前の周りの人達も死ぬ！そんな悠長な事言っていていいのか？」  
健は黙り込んだ。まったくその通りだと思った。

「わかったよ。幹部に会う。」

そう言うと二人でりょうの部屋を出た。

幹部の部屋はまっすぐ行っただけ一番豪華な扉の部屋だという。

そこへ向って健とりゆうは歩き始めた。

りゆうはノックをした。

健の心臓がバクバク音を立てている。

熱が出そうだ。やくざなんかドラマの世界の話だと思っていた。

見た事もない。聞いた事もない。健とは完全な別世界の人間だ。

そのやくざをこれから説得するんだ。

ある社長を殺してくれと。何のメリットもない殺しを頼むのだ。

何千万の大金があれば別だが、そんなものはない。どう説得するの

だ。健はかつてないほどの緊張をしていた。

「根性」

「すいません。やすひこです。」

りゆうは偽名だったのか。本命はやすひこって言うのか。

「・・・なんだ。」

いかにも怖そうな声が聞こえた。

「ある相談事があります。」

「・・・入れ。」

「ありがとうございます。」

そう言われるとりゆうは扉を開けた。そこは健が見たことがない世界だった。置物やらなにやらいろいろと骨董品が置いてある。人が

三人椅子に座っていた。

「まあ座れや。」

「失礼します!」

りゆうが言うと、風格のある、一番豪勢な椅子に座っている人の前に座った。この人が多分幹部の取締役だろう。この親玉の横に他のふたりが座った。2対3の形になった。

「なんだ相談って。久しぶりの休日によ。」

「まことにすいません。何しろ時間がないというもので。」

そついうとりょうは健の肩を持った。

「こいつ、健といいます。こいつの話を聞いていただけませんか？」

「ああ？堅気か？堅気なんかと話す事はない。帰れ。」

そついわれてもりょうは引き下がらない。

「こいつは俺の親友です。命が危ないんです。話だけでも聞いてください。」

「ほほう。親友ねえ。」

そつ親玉がつぶやいたその時だった。親玉の横に座っていた男が立ち上がった、りょうの胸倉をつかんで叫んだ。

「てめえ堅気に親友なんてもってんじゃねえよ！ぶつ殺されてえか！」

「おい。ぎゃあぎゃあ騒ぐな。手を離せ。」

りょうが反発した。親玉にはへこへこしていたが、りょうは横のふたりとは対等の権力をもっているのだと健は思った。

「なんだと！」

もう一度横のやくざが叫んだ時に、親玉が口を開いた。

「・・・やめねえか。」

つぶやくようにして言った。ボリウムもなく、迫力もないが、その言葉だけで健は動揺していた。圧倒的な圧迫感だった。恐怖心をおおる。これがやくざなのか。

「堅気の話なんか聞く気になれねえが、やすの頼み事なら仕方がねえな。こいつには相当お世話してもらってるからな。こいつらふたりよりもよつぽど役に立つぜ。」

その言葉をきき、りょうはかなり裏の世界でのし上がったのだと少しばかり感心した。

「ありがとうございます。」

「おう。早く話せや。」

「はい。早く話せよ健。」

こんな調子で本当に喋る事が出来るのか？そう思いながら健は口を開いた。

「あの、ちょっと厄介な事に巻き込まれまして。命が危うい状態です。」

「僕は命を狙われています。」

「命ねえ。」

親玉が率直に聞いてきた。

「誰に命を狙われている？」

なんて答えればいいのだ。日記の遂行のためだと言えば、間違いない反感を受けるうえ、健は死ぬ。やはりここは隠すしかなかった。

「わかりません。というよりは言えません。」

正直に答えた健に親玉はムツとした。

「わからない？ どういうことだよ。舐めてんのかお前。」

健は親玉の迫力に失禁を起こしそうだった。怖い。

「舐めていません。いえないのはこっちの事情です。この事情も命に関わります。この事を誰かに話せば俺は死にます。」

「夢みたいなさいつてんじゃねえ。てめえ今ここで死ぬか？」

恐怖が健をあおる。

「俺はまだ死ぬわけにはいかないのです。だから誰に命を狙われているのか、この俺が抱えている真相は誰にもいえないのです。もちろん、やすにも言っていないません。」

親玉の口調が序所に荒々しくなってきた。

「そんな事で俺が相談のれると思ってるんか？」

「のつていただかないと僕はおそらく死にます。」

親玉はつぶやくようにしていった。

「堅気の命なんて関係ない。帰れ。」

「嫌です。」

きつぱり言ってしまった次の瞬間だった。両端のやくざが健をつかんで部屋の隅までひっぱりだした。そして腹を一発殴った。

健はもたえ、地面に倒れた。それをふたりは足で踏み続けた。何度も何度も。

健は暴力を受けるのは生まれて初めてだった。

「おいやめろよ！」

そういつてりょうが止めに入るのを親玉は止めた。

「やらせておけ。坊やはこの世界を知らなさ過ぎる。」

健はふたりのやくざに殴られ続けた。

口に血の味が広がり、腕は動かない。服を見ると血で染まっていた。

「その辺にしておけ。死ぬぞ。」

親玉が健の方に歩いていった。

「おいぼうや。どうだこの世界は。」

健に聞いた。

「暴力なんて俺の今の状況に比べたらなんともない。気が済むまで殴れ。そうして俺の相談にのってくれ。」

親玉は無言だ。

「おつし、お望みどおり殴ってやるよ！」

そういつてふたりは殴り始めようとした時だった。

「やめねえか。」

親玉が止めた。次の出る言葉に健は愕然とする。

「指詰める。それでお前の願いはすべて聞いてやる。俺はお前が気に入った。事情はもうどうでもいい。その代わりこの世界でのルールでな、上のものに意見や命令口調を聞くとな、罰を受けなきゃいけないだわ。」

りょうが止めに入る。

「やめてください。親方。こいつは堅気なんです。この世界のルールは利きません。」

親玉はりょうを睨んだ。

「お前の意見なんて聞いてねえんだよ。てめえも指詰めるか？」

りょうは一步下がり、土下座をした。そして社長は健を見た。

「どうするんだ。つめるのかつめねえのかどっちだ？つめねえんだつたらお前の医者代ぐらい俺が出してやる。その代わり帰れ。もしつめる度胸があるなら、俺はお前の言う事を利いてやるよ。」

健は即座に答えた。迷う理由はない。

「つめさせてください。」

「儀式」

健の周りをやくざが囲む。かなりの人数だ。全員黒スーツに柄シャツだ。

親玉と健で机を挟んで座っている。そして、刃物と木板が置いてある。

「麻酔は無しだ。そのまんま自分の指に一直線に突き刺せ。」

健は無言だ。緊張している。

「どの指でもいいぞ。この世界の常識としては大抵小指だな」

「俺は別に腕を落としてもいいぐらいです。願いを聞いてくれるなら。」

親玉は少し驚いた表情を見せて椅子に深く座りなおし、ゆっくりと口を開いた。

「・・・いっちょまえの口を利くじゃねえか。もし本当に腕に刺す勇気があるなら俺はお前を尊敬するぜ。腕を切り落とすって事がどんな事かわかってんのか？人生の半分以上の快楽を失う。行動範囲も狭くなる。そんな人生お前は絶えられるか？悪い事は言わない。小指ぐらいにしとけ。」

親玉の言葉にまたしても上乘せした。後戻りはできない。

「俺が置かれている状況はこんなちっぽけな事じゃありません。」

「ほう。」

健は黙々と喋り始めた。

「俺の為に俺の周りの人間も死んでいくのです。現に俺はふたり殺しました。そして高校の時の友達と教師も死にました。これからどんどん人が死んでいくのです。俺のせいで。こんなことでいいならいくらだってしますよ。」

親玉は間を置いて真剣な表情で言った。

「・・・じゃあ腕を落とせよ。落としたらお前の人生俺がしょってやる。」

周りのやくざがざわつき始めた。しかし健は言った。

「言う事を利いてくれるだけで良いです。腕は落とします。」

「・・・いい根性だ。虚勢はほどほどにしてやってもらおうか！」

23年使い続けてきた左手もこれでおさらばだ。これぐらいの代償は追わなければならない。これで桐原社長が殺せるなら本望だ。

そして青山達が死んだ事が報われるかもしれない。

健は刃物を持ち、左手の手首の20センチぐらい下を狙った。

ここをさせば間違いなく腱が切れ、腕は動かなくなるだろう。

そして力を込めた一直線に右手をまっさかさまにおろした。

・・・え？

やくざ一同が騒ぎ始めた。

そして親玉が拍手をする。それにつられて周りのやくざもざわつきながらも拍手を始めた。どう言う事だ？腕はちつとも傷ついていない。

刃物を見ると刃先が引っ込んでいた。これはおもちゃだったのだ。

親玉は口を開く。

「いい根性だ。気に入った。お前の言う事聞いてやるよ。健。」

そして改まってりゆうにいった。

「堅気の間にも根性が据わっている奴もいるんだな。面白い親友を持ったな。」

「信じられる」

親玉の部屋で健の怪我の治療をした。顔中、痛々しい傷が残る。右手が動かなかったのは脱臼の疑いがあると親玉が部屋に呼びつけた医者に言われた。安静にしることのこと。

もちろん怪我の詳細は医者には伝えなかった。

医者は暴行で負った傷だと感じているようだが、やくざの組相手に怪我の事をしつこく聞く勇氣はこの医者にはなかったようだ。だから健の治療をした後暴行の事には一切触れず、すぐさま帰ってしまった。

親玉が周りにいたやくざ達を部屋の外へ追い出した。

そして親玉は真剣なまなざしで健に問い詰めた。言葉には先ほどには感じられなかった、暖かでやさしい喋り方だ。

「もう野次馬はいない。お前に文句言うやつはいない。話したくない事は話さなくていい。ちよつとずつお前の周りで起きている事を教えてくれ。」

健はおもむろに口を開いた。

「ありがとうございます。話せる範囲で言います。」

「おう。」

健は言葉を選びながら答えた。一つ間違えば死だ。

「ある怪奇現象が僕の身の周りでおきました。」

親玉は不思議そうに聞いた？

「怪奇現象？なんだそれは。その内容もいえねえのか？」

健はすぐさま答えた。

「はい。すいません。その怪奇現象で俺は人殺しを命令されました。すでに2人殺しました。一人はナイフで刺し、空き地に埋めました。ニュースで報道されていないので警察にはばれていないのではないのでしょうか。一人はこの手であやめた訳ではないのですが、自殺に追いこみました。」

親玉は男気のある言葉で健を同情した。

「俺でも人は殺した事がない。お前、いろいろと苦労したんだろうな。死んだ奴の魂を背負う事になっちまった。気の毒だ。」

健は話を続けた。

「それであと一人を殺さなくちゃいけないのです。殺さなければ、僕の身の回りの人間が殺されていきます。そしてその後には自分も殺されます。だから僕は周りの親しい人や自分を守るためにあと一

人を殺さなくちゃならないのです。」

少しばかり思いつめた顔で健に聞いた。

「お前の話は全部信じる。しかしこの現象って奴は俺の組が動いて解決できないのか？」

健はゆっくりと答えた。

「悪いんですけど、できないんです。親方の組がどうこうじゃなくて、これは誰にもどうする事はできません。あと一人を殺さない限りこの怪奇現象は解決しないのです。」

「夢見たいな話だ。お前以外の人間がこの事を喋っていたら間違いない信じない。お前だから信じられるんだ。」

健は親玉の暖かみを感じた。やくざという肩書きではあるけれども、ほんとにいい人だと思った。

「わかったよ。これ以上はきかねえ。どんな状況で何がお前を苦しめているのかは全然わかんねえけど、それ以上は話せないんだろ？」

「・・・はい。その通りです。」

親玉は息を吸って、少しボリュームを上げた声で言った。

「よしわかった。お前に手を貸そう。お前の言う事を聞いてやるよ。大体どんな願いかはわかるよ。そのあと一人って奴を殺して欲しいって相談だろ？」

「そうです。」

そして親玉は少し口元を緩めて言った。

「わかった。その一人の暗殺に力を貸すぜ。」

健はほっとした。こんな怪我を負ったかいがあった。おもちゃではあったが、刃物を腕にさしただけある。そしてもうすぐ終わるのだ。この日記遂行も。殺人も。

・・・終わりが近い。健はそう思っていた。思いたかった。

## 第六話

夜の屋上は暗黒のように暗かった。

地上170メートルの屋上。少し肌寒さを感じる。

照明も何もなく、銃の取り付け作業に手間取った。

神谷隆一はスコープとサイレンサーポインターを取り付けた。

これで準備はできた。あとは桐原を殺すだけ。

殺害予定時間はあと15分。

桐原は夜の21時に帰宅するためにエネルギーの会社を出る。バス停までの歩く道のりの50メートルが勝負だ。その間に銃殺する。

神谷は組随一の腕前だ。これまで何人もスナイパーとして、ターゲットを暗殺してきた。その人数すでに69人。あと一人で70人殺害という驚異的な殺害率だ。すべてのターゲットは闇に埋もれている人間で警察沙汰になった事はほとんどない。表ざたの人間を狙うのは今回が初めてだ。

神谷は殺しに特別な感情は持たない。命を助けてくれた親方のためにターゲットを確実に殺す。神谷はその事しか考えていない。

まもなく殺害予定時間だ。

神谷は桐原が出てくるのを待った。

「はやくこいよお。俺の獲物ちゃん。」

神谷はスコープで地上を見張った。

会社から一人の人間が出てきた。桐原社長だ。神谷は桐原の顔を鮮明に頭にたたきつけていたから、スコープを通した目でしっかりと確認した。

神谷は銃を構えた。ポインターをつけて桐原に向けた。ポインターの光は耳の上辺りに移っている。

「あばよ。お前にうらみはねえが親方の頼みだ。あの世でうらむんだな。」

そう言って引き金を引こうとした。

???

・・・どうなってるんだ。

指がうごかねえ。体もだ。金縛りにあった。やべえ桐原がバスに乗る。今日中に殺害しないと親玉に害が被ると言っていた。

冷静沈着の神谷は焦っていた。今まで金縛りなんか体感した事がなかった。

体を無理やり動かそうとしてと無駄だ。

その時だった。

「無駄だよ。」

え？誰だ。この屋上は立ち入り禁止で、誰もこれないはずだ。

その時金縛りが解けた。すぐさま後ろを向いた。

一人の学生らしき男が立っていた。

「誰だ貴様！なんでここにいる！！！」

「お父さんは殺せないよ。お父さんは健君に殺させるんだ。」

神谷は頭が混乱した。何言っているんだこいつ。

「健ってあの堅気か。そんなのしらねえ。」

金縛りが解けた神谷はすぐさま地上で桐原を見た。まだ間に合う。

そう思い再び地上に銃を向けたそのときだった。

だめだった。

そう聞こえた時だった。

体が前にのめり込んでいく。何かにひきつけられるというか、体が操られている感じもする。何故だかわからない。どういう現象がおきているのかわからない。前身に血の気が引く。

前に体を支える物はない。落ちる。神谷は死を感じた。

「ばいばい。」

神谷は屋上から転落した。

落下の時、屋上の男はいなかった。

それが最後の思考が働く瞬間だった。

健はパソコンをつけた。昨日の晩に桐原は死んでいるはずだ。それを確認して、ノートを近くの公園で燃やそう。それですべてが終わると信じた。

ニュースサイトのトップにそれは書かれていた。

（暴力団の銃を持った男がマンション屋上から転落。）

暴力団員の神谷隆一（31）が昨晚21時30分、15階立てマンションの屋上から転落死した。遺書は残されておらず、銃を持っていた事から、警察は誰かを殺害するために屋上にいたが、誤って転落したと発表した。

健はニュースを見て絶望を感じた。昨晚殺害に失敗したんだ。なんでだ。神谷は殺害専門のプロだって親方は言っていた。そんなミスを犯す訳がない。屋上で何が起きたんだ？

健はある一つの事が頭によぎった。

まさかな。。

そう考えた時、パソコンでりゅうがログオンして、健にメッセージチャットで問いかけてきた。

りゆう「大変な事になった。

けん「殺害失敗したんだろ。

りゆう「それもそうだが、もう一個やばい知らせがある。

けん「なんだ？

りゆう「親方が死んだ。別の組の奴が乗り込んできて射殺された。組はそいつを蜂の巣にしてすぐさま殺したが、親方は撃たれて死んだ。

けん「本当か？

りゆう「こんな嘘ついてどうするんだ。こっちの組はとんでもない事になってる。どこの組の奴かを突き止めてこれから抗争が始まる。すまないが、けんの用事に付き合ってもらえない。

けん「そんな馬鹿な。

りゆう「じゃあそう言う事だから、悪い健。

そういつてりゆうはログオフした。

健は呆気にとられた。そんな馬鹿な話があるかものか。親方が死んだって？ 少なくとも親しい人間が死んだ。ある一つの思考がよぎる。

昨日殺害失敗して、桐原は生きている。

今日になり、三日目だ。その犠牲として親方が死んだ。

・ ・ まして俺のせいで周りの人間が死んだ。  
この暗殺が失敗して、会社は桐原社長を匿うだろう。これで桐原を  
殺すのは絶望的だ。

親方が死んで、組はもう俺に力を貸してくれなくなった。

健は絶望の淵に立たされていた。

なにも力がわいてこない。

もう駄目だ。

## 第七話

組の長が死んで1日がたった。

健は無気力のまま、何にも考えず、何も想像せず、ただ現実から逃げたい。そう思い、ベットで寝続けていた。

もうどうでもいい。何もかも。もう無理なんだ。俺は死ぬ。親もりょうも青山の家族も。全部死ぬんだ。

昼の12時どきになつて階段の音が聞こえた。親は普段1階で生活をしていて、2階は健だけしか使わない。ほとんど健が2階を独占状態だった。だから飯を運ぶ時以外は階段の音がしないはずだ。昼飯はさつき運んできた。

だから別の用があつて階段を上ってくるのだらう。

健は起き上がって、ドアを見つめていた。

コンコン。

見つめる先の扉からノックの音が響いた。

「なんだよ。」

健が答えると、返答がなかった。

「用がないならノックなんてすんな！下へ行けよ。」

親は口を開いた。

「ご飯美味しかった？」

母親の声がした。くだらない質問だと思った。なんだよ急に。

「どうでもいいだろそんな事。」

強く健が答えると、母親は何かを望んでいるかのような、嬉しそうな声で喋り始めた。

「健が家の外で何かやってるのわかってる。貯金のお金が結構減ってたし、ずいぶん家を留守にしていたみたいだしね。ギャンプルで

もいいのよ別に。でも健には外の世界をいろいろと体験して欲しいの。」

外の世界か。外だけでなく、裏や闇やらいろんな世界を体験したさ。お前が一生かかってても言葉の意味はわからんだろうけどな。

そう思うと、健は怒鳴った。

「いまさらなんだよ！親の愛情なんて受けても仕方がないんだよ！俺が苦しい時にお前は何をしたんだよ！お前は俺の何にもわかってない！今まで通りほっといてくれ！」

母親が鼻をすすっている音が聞こえる。泣いているのだと健はすぐにわかった。そして母親は答えた。

「好きでほっといたわけじゃないの。私やお父さんもどれだけ健を心配したかわかる？高校卒業して健が部屋から出てこなくて、

心配で心配で。それで少し私が精神的に参ってきて、カウンセリングを受けたわ。」

初耳だった。

「それでカウンセリングの先生に言われたわ。息子さんは今必死にもがいています。両親からの期待を背負いそれが重圧となり、自分で自分の世界を作っています。それを見届けやってください。ほっといってください。って。私には無理と反論したわ。でもそうしないと息子さんは社会復帰できなくなりますって言われた。息子さんがその世界に興味を持ち始めて、自分から部屋を出るまで関渉しないでください。そう言われた時どれだけ悲しかったか。息子を自分の手で助けてやれないこのもどかしさ。悔しさ。苦しかったらうね。健。助けてやりたかったわ。この手で。」

その言葉を聞くとふと日記の事が頭に浮かんだ。この心配してくれた両親も死ぬんだ。みんな死んじゃうんだ。俺のせいだ。

それを思うと何かあふれるものを感じた。

健は布団にうずくまって母親にばれない泣き声でひっそりと泣き始めた。そして泣きながらこう答えた。

「・・・いろいろごめんな。もういいよ。就職先も見つかったんだ。心配かけてごめん。ありがと母さん。」

それを言っていると母親は声を出して泣き始めた。

「おめでと、健。これからは健の助けになるから。なんでも話してね。今までごめんね。ほっとらかしにして。」

健は少し間を置いて答えた。

「ありがと。もう大丈夫だから。」

「そう。わかったわ。じゃあ母さん1階に行くわ。健も気がむいたら部屋から出てきなさい。」

3年ぶりぐらいに母親から命令口調で言われた。今までの俺なら怒鳴っていただろうけど、今はとても嬉しかった。

「ありがと母さん。」

そういうと母親は階段を折り始めた。母親の泣き声がまだ聞こえる。

ごめんな母さん。もうじき死んじやうのにな。俺のせいで。こんなに心配かけてたなんて知らなかった。見捨てられてたと思った。ごめんな母さん。ごめんな。

そう思うと、健は立ち上がった。部屋をでて、少し薄暗い階段を下りて、台所に言った。そして母親に一言言った。

「週刊誌を買ってくるよ。250円ちょうだい。」

そういうと母親は嬉しそうにかばんから財布を出した。

「もう社会人になるんだから、漫画ばっか読んでちゃ駄目よ。それにこれからは自分で稼いだお金で本を買いなさいよ。」

健は嬉しくて顔がにやけるのを必死にこらえた。久しぶりの家族の会話だ。

「わかってるって。じゃあ行つて来ます。」

そういつて母親に見送られながら玄関を出た。

「いつてらっしゃい」  
それが最後の言葉だった。

この前この道を歩いた時は1週間前の夜だった。

夜でわからなかったが、引きこもっていた3年間で変わった点がい  
くつもある。小さい頃よく遊んだ空き地に家が建っている。あの大  
好きだった木がなくなっている。顔見知りのおじさんの家がなくな  
っている。3年間でいろいろ変化したんだな。その変化を楽しみな  
がら健はコンビニまでの短い距離を歩いた。

そしてふと思った。あの日記を買った店はどこだろう。ほとんど暗  
かったし、健は場所をよく覚えていなかった。

健は周りを見渡したが見つからなかった。

なんでないんだ？

俺の人生を狂わした忌まわしき本屋。今頃どこで何をしているんだ。

そんな事を考えながら歩いているとコンビニが見えて来た。

早歩きでコンビニへ向かい、週刊誌を買った。その帰りにジュース  
を買い、飲みながら家に向って歩いた。

ふっと思いついた。杉浦ってどうなったんだろう。1週間たった今  
も杉浦のニースを見ない。まだ捜査願いが出されていないのだろ  
うか。結局杉浦の命が無駄になってしまう。その事が健に激しい罪  
圧感を襲った。

手を合わせて、謝りに行こう。

そう思い、家とは逆の方向へ歩き始めた。中川区の杉浦が埋まっ  
ている空き地までは歩いて1時間ぐらい。健は3年間の有り余った元  
気をぶつけたがっているかのように、そして歩ける喜びをかみしめ

ながら歩いた。

30分ぐらい歩いたが、目的地まではまだ距離がある。

近くの公園でベンチに座って休憩する事にした。

そしてベンチに座っていると、激しい音が近づいているのがわかる。消防車の音だ。

そして消防車は健の座っている公園の前を通り、音を残しながら去っていった。

健は激しく嫌な予感がした。

今日は4日目だ。また今日誰か死ぬ。

まさか、そんなはずはない。その時タクシーが通り過ぎるのが目に付いた。

「タクシー！！！」

そう叫びながら、タクシーを追うとタクシーは止まった。

「お急ぎですね。どこですか？」

運転手が聞いてきたので健はあわてて答えた。

「あの消防車の後を追ってください。」

「わかりました。急ぎます。」

そういうとタクシーが発進した。

健が歩いてきた広い道をタクシーが家に向って走っているように思えた。現に、家に向って走っている。しばらくして黒い煙が見えてきた。家の方向から上がっている。

「あちゃあ、やばいねこりゃ。」

運転手がつぶやいた。

母さん。生きてくれお願いだ。

そう手を握りながら強く思い続けた。

しかしその願いも神には届かなかった。

これで中学の恩師が死んだ時の神頼みと2回続けて叶わなかった。

健は神を疑った。お前は何様だ？どれだけ俺をねじ伏せれば気が済むんだ？

家が赤々と燃えて、黒い煙が高く燃え上がっている。隣の家にも火が移っている。となりの家の住人は自分の家を見ながら叫んでいる。そして一つの思いが再びよみがえった。となりの住人なんてどうでもいい。母さん。母さんはどこだ！

近くにいた消防員に聞いた。

「母さんは無事なんですか？」

急に聞かれて消防員も驚いただろう。しかしその事も健はお構い無しだ。

「お母さん？なんか、誰か一人残されてる見ただけだ。」

それを聞くと燃え上がる家に走っていった。

「こら君！危ないから！！止まちなさい！！！」

そういつて消防員たちは健を取り押さえた。

母さん！！母さん！！！！

健は叫び続けた。のどがかれるまで。そして消防員が日を消し終わるまでの2時間。ずっと泣きさけんで、同情の目を受け続けた。

「お客さん。もう店閉めるから出てって。」

肩を揺すられ起こされた。店員が偏見の目で健を見てる。

「はいはい。」

店員が疑問を抱きながら聞いてきた。

「お勘定高いよ？こんなに払えるの？」

「・・・金はある。払うから店の外まで肩を貸してくれ。」

そういうと10万円を店員に払った。

「おつりはいらなから肩を貸せって。」

「はいはい。お客さん若いのに、自暴自棄になったら駄目だよ。」

健は黙った。店員がドアを開け、健を払った。

「じゃあまた来て下さいね。」

そういうと、ドアを勢いよく閉めた。

健はふらつきながら歩く。つい最近まで酒も飲んだ事なかったのに、なんでこんなに飲んでしまったのだろうか。

吐き気がする。吐きそうだ。

健は道路わきの溝までふらふらした足で歩いていき、勢いよく吐いた。

嘔吐するのは何年ぶりだろうか。そんなくだらない事を考えた。これからどこへ行こう。もう酒はいい。一生分飲んだ。

家は燃えて帰る所がない。死ぬ前にホームレスの気持ちでも感じてみるか。

そういうと、左脇にあった公園の中に入って、ベンチに倒れこんだ。

そして健は目を閉じた。

暗闇だ。真っ暗だ。

母さん、ごめんな母さん。焼け死んじゃうなんてな。俺、母さんに何にも親孝行してやれなかった。

青山もな、お前はいい奴だったよ。一緒に働きたかった。

先生、恩をあだで返す事になっちゃった。

健の中でいろんな悲しい思い出がよみがえっていた。

涙が左目から流れた。

ふと目が覚めた。

ここは公園か。

頭痛が激しい。

時計が3を指していた。夜中の3時20分

健は酔いがさめていた。ぼーっとはするが、意識ははっきりしている。そして、ある考えが頭によぎる。

刑務所に行こう。そして杉浦と青山を殺した罪を償う。そして刑務所の中で命を引き取るう。

その考えが浮かんでから20分公園のベンチに座り、今までの人生を振り返っていた。

小学生の時、恵美ちゃんに告白して振られたっけ。読書感想文がコンクールで優秀賞を取ったときは嬉しかったな。

中学生になって、先生の家遊びにいたり、河合たちと成年誌を夜中に買いに行ったな。

高校はあんまりいい思い出がないや。でもとなりの席の人が教科書を見せてくれたな。

母さんとは一緒に英語の参考書を買に行った帰り、ハンバーガーを食べたっけ。

父さんと映画に行った時、父さんは感動して泣いてたな。

まだ生きたかった。楽しみたかった。人生これからって時に死ぬなんて。まだ結婚していない。童貞だし、子供の事も当分先だと思っていた。俺の子供ってどんな子だろうな。

健は泣いた。悔やんだ。一冊の日記に俺の人生が終わろうとしている。人生の最後は刑務所だなんて。でもそれが一番いいんだ。杉浦と青山の報いだ。しょうがない。筋は通そう。

結局、自分の部屋でほとんどをすごし、終わりの刑務所の部屋で過ごすのか。俺は一生引きこもりだな。

そう無理に笑い声を上げて警察署の方面へ歩き始めた。日記は公園のベンチにおいていた

## 第八話

「だから、杉浦を殺したのか？少し矛盾しているぞ。正直に話さないと一生牢から出られないぞ。」

刑事の怒鳴り声が部屋中に響き渡る。

「嘘は言ってません。金銭関係でトラブルがあつて、公園まで呼んで殺しました。」

「だけど、最重要人物の事務室に訪れた人は茶髪にめがねをしていたと事務員が言っているんだ。お前はそんな特徴ないではないか。」  
「たしかにそうだ。わざわざ人目を気にして、そんな小細工までしたのに、まさかその小細工が自分を苦しめるなんて。」

「あれはカツラとだてめがねです。アリバイ工作のためにつけました。」

「しかしだねえ。」

「そういうと刑事は黙り込んだ。」

「また明日話は聞くから、君は少し留置所で待機してなさい。明後日にはちゃんとした判決がでるから。あと裁判はもつと先になる。それまではここの署にいてもらう。」

「わかりました。」

「そういうと健は肘をつかれ、連れて行かれた。」

「ふう。。。」

「刑事がため息をついている。」

「何でわざわざ自分がやったって深夜に言いにくるんだ？時間を考えろってなあ。」

「そうですね。」

「刑事に疲労と眠気が漂った顔をしている。」

「完全に今のところ、榊原健が殺人をしたって根拠と動機が矛盾している。完璧なアリバイ工作と完璧な計画殺人なんだろうな。彼は

頭がいい。」

「そうですね。」

そういうと刑事は手を組んだ。

「それにしてもこんな完璧な殺人までして、自供してくるなんてなあ。。」

「そうですねえ。」

部屋は暗かった。トイレが真横にある。異臭が漂っている。早く刑務所に行きたい。早く俺を処理してくれ。

そう健は願い続けた。親しい人が死ぬ報告は受けたくない。

留置所のすみで耳をふさぎながら、おびえていた。

「起きろ榊原。」

大声で起こされた。激しい眠気が襲う。

「お前は北原刑務所に移動だ。さあ出るんだ。」

健は寝起きでなにがなんだかわからなかったが、部屋の外へ出た時、警官が手に手錠をかけた。

そして、健は警官に連れられ、警察署の外へ出て、パトカーに乗せられた。

「こちらは死体が埋めてあったとされる公園です。報道陣が凄い数です。周りの住民もこの人通りの少ない空き地でまさかこのような殺人事件がおきているとは思いませんでした。犯人は無職の榊原健23歳。榊原は家が全焼し、帰る所がなかったため自供したとの模様です。なぜこのような悪質な殺害を23歳のまだ若い榊原が思いついたのか。榊原は金銭トラブルが犯行の目的だと言っているそうです。しかしまったく榊原と被害者の接点はないそうで

す。金銭トラブルの事件が後を絶ちません。」

杉浦殺害は大きく事件に取り上げられていた。健の親しい人間はこの事をどう思うのだろう。まさか健が。そう思うに違いない。健が自分たちの為に殺人まで犯してくれたことなんか、知る由もないだろう。そして一生知ることのないまま死んでいくのだ。

健は薄暗い部屋の中で、青山の家族の事を考えた。俺が母さんが死んで悲しんでいるように、青山の娘も相当悲しんだだろうな。それを考えるとほっとした。この苦しみや悲しみも青山の償いだ。

そして、何時間がたったある日、警察が健の前で止まった。

「お前の親や、親戚やいろんな人達がお前のために著名運動をしてる所を暴力団に全員拉致られたらしい。通報がすぐにあったが、足がまったくつかめない。それから行方不明だ。おそらくは全員。」

そういうと警察は黙りこんだ。そして再び口を開いた。

「お前はここから出る事ができない。残念だったな。これもお前の罪を償う機会として、しっかり罪の重さを感じるんだ。」

健は無言だった。それを見て警官は舌を鳴らし、どこかへ行った。

そうか。とうとう明日か。俺が死ぬのは。

何時間がたっただろう。

外の光が入らない刑務所では極まれに、今が夜なのか朝なのか昼なのか時間がたつにつれてわからなくなると聞いた事がある。その通りだと思った。

自分がいつここに入り、いつまでここにいいのか。そして、今何時なのか。昼なのか朝なのか夜なのか。まったくわからなかった。自分の部屋で生活していた引きこもりの時期とよく似ていた。ただ闇雲にパソコンへ向い、チャットと掲示板を回る日々。なんの目的もなしに生きていた3年間。その状況に今が似ていると健は思い込んだ。

死ぬ事に抵抗はなかった。怖くもない。早く死にたい。殺してくれ。今まで死んだ人間は、事故死、殺害、拉致暴行、火事、自殺などいろいろな理由がある。自分はどうやって死ぬのか。ある意味見ものだった。

小学校の教師の言葉を思い出した。

「命は大切にしなさい。」

今考えるとばかばかしい。あまりに周りの人間が死にすぎた。生きるってなんだ。死ぬってなんだ。命ってなんだ。

なんで命は大切なんだ？そんなに大切なら神様はなんで俺の大切な人の命を助けてくれなかった？

命が大切。そんなの嘘っぱちだ。神なんていない。いるのは俺を殺そうとしている桐原純也という自殺で死んだ化け物だけだ。

そんな事を考え始めたらきりが無い。健は横になった。

そして日記の事を考えた。

桐原純也か。どんな奴なんだろう。俺の命をもて遊び、殺人まで犯させた悪魔だ。

・・・早く俺を殺せ。

健がそうつぶやいた時だった。

「健君。」

後ろから声がした。とうとう来たな化け物。しかし怒る気にはなれなかった。複数の命を健から奪ったこの青年を。

「お前が純也か。」

「そうだよ。」

健は笑顔でこういった。

「お前のせいで俺の人生めちゃくちゃだよ。」

「ごめん。でも友達が欲しくてさ。僕いつも一人なんだ。」

そう聞くと健は答えた。

「俺も、お前の日記を読むまでは一人だったさ。引きこもりのニートオタクだ。けどな、この日記を読んで、殺人を遂行しに、たった7日間だけ、外へ出たんだ。そしていろんな恐怖体験をして、俺は変わったんだ。もうニートなんかじゃない。」

純也は無言だった。

「だからお前も変わる努力をすれば絶対に変わったんだ。それを人のせいにしてさ。自殺をしたお前が悪い。」

純也はむっとした。

「だまれ!!! お前に何がわかる。ひとりぼっちの寂しさを!」

健は、それに答えるように強く言った

「わかるさ。お前の苦しみは青山に聞いた。青山はお前を思って自殺したんだ。辛かっただろうなってよ。。だけど逃げたのはお前なんだよ。お前が悪い。それを認めないとお前は一生変わらない。」  
純也はまたしても無言のままだ。そしてゆっくり口を開いた。

「青山がそんなことを言ってたのか。」

「そうだ。今では青山はお前を友達だったと思ってるはずだよ。」

純也はやさしそうな顔をした。

「友達か。いい響きだな。」

「そうだ。俺もお前の友達だ。」

「本当?」

純也は嬉しそうに答えた。

「ああ。だからお前も変わる努力をするんだ。こんな殺人を犯すの

はおかしい。自殺した自分の責任なんだ。お前ならやれる。」

純也は最高の笑顔を作り健を見てこういった。

「ありがと。僕も変わるよ。健はこの世界で生きて。僕は青山と杉浦先生に好かれるようにちゃんとした人間になるよ。」

そう言つて純也は消えた。

終わったのか？殺されなかったのか？助かった。

健はしゃがみこんで、つぶやいた。

「助かったよ。みんな。みんなの分まで生きるよ。」

## 最終話

杉浦の事件は証拠不十分で不起訴になった。

健は嘘をついて、刑務所に寝泊りしていたと、罪に問われたが、火事のショックから来た行動と言う事になり、3週間で留置所から出られた。

なんで杉浦の殺害が不起訴なんだ？

警察に聞いた事がある。何しろ、被害者と健が結びつかない事に警察は疑問を持っていて、詳しく調べた所、死体から容疑者らしき物の髪の毛と服に血痕が見つかったのだ。その血痕はA型で、健はB型。その時点で健の殺害疑惑は薄れていった。

それで健の署名運動時の集団拉致事件で、警察が捜査をした所、ある暴力団の部屋から複数の死体が発見された。

その死体の中の人間の髪の毛と杉浦に付着されていた髪の毛が一致したんだ。その拉致事件の被害者の名前は川島良。りょうだ。組に使っていたやすひこという名は偽名でりょうが本物の名前だったのだ。

りょうはチャットで健に言われて、空き地に死体を見に行った時、いろいろと細工をしてくれたのだろうと思った。だから死体発見も遅れて、事件が公にならなかったんだ。すべてはりょうのおかげだった。おそらく健が自供しなければ捕まる事はなかっただろうと警察は言った。

そんな事までしてくれていたのか。友達はいたじゃないか。家に引きこもっていても。俺はずっと一人じゃなかったんだ。

「おう！健！今晚のみに行くぞ！」

部長の声が聞こえる。

「すいません。まだ仕事が残ってるし、今日はちょっと届け物があ

るので。」

「そうか。また誘う。なにしろあそこのつまみは天下一品だからな。」

そうつぶやくと部長は廊下へ出て行った。

もう俺も終わるか。

機械の電源ボタンを切り、工場を後にした。

工場の外には小さな女の子が立っていた。

「健おじちゃん！仕事お疲れ様。」

知美がそういうと少し黒ずんだ手で頭をなでた。

「元気にしてるか？」

「うん元気！」

はちきれんばかりの声で叫んだ時だった。

「こら知美駄目でしょ。あらすいません。」

青山の妻だった。

「いやあ、いつ見ても青山さんに似てますよ。知美は。」

妻は笑った。

「そうですか？まあ元気だけが取り得なんですけどね。」

「それより、これ差し入れです。帰り道に食べてください。」

健は嬉しそうに答えた。

「ありがとうございます。こんな美味しい手料理感激だな。」

「いつでも食べに来てください。」

そうつと青山の妻と知美は工場を後にした。

元気に育ってくれてよかった。

そんな事を考えながら、電車に乗った。そして駅から歩き、家賃3万円のアパートの鍵を開けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8688a/>

---

遂行日記

2010年12月23日07時45分発行